

遺跡名	所在地	形態	規模	発見場所	須恵器	土師器	その他	時期
15号墳	鷲田	円	48.6	平行				
16号墳	鷲方	L字型	2.4×2.6	直行	壺1(漆)			松山Ⅱ
17号墳	方	L字型	2.3×2.6	把手付壺1(壙部)	壺1-1(埴生斜面)			I
18号墳	方	L字型	2.3×2.6	直行	壺1(埴生)			
19号墳	乃木町宮	略方	2.5×2.1	直行	残片(埴生)		子持勺1 白土(埴生被出)	15
20号墳	円	円	17.1		残片	高环5、直口壺1 (漆)	鉢底23(万椎内) 握刀1(稍外)	松山Ⅲ
敷谷1号墳	東生馬	方	1.6×1.5	直行				
2号墳	方	方	1.6×1.2	平行				
5号墳	方	方	1.6×1.2	対角	壺2(漆、漆分壺)			1
3号墳	方	方	1.6×1.2			高环7(漆)	刀子1(包内) 直刀1(包内)	

(文獻)

- 鳥根県教育委員会「大坪古墳群：『島造1号バイバス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』」1976
- 東出至町教育委員会「寺庭古跡調査報告書」1983
- 浅沼政樹・宍道今弘「鳥根郡東川美佐谷1号墳出土の須恵器」『吉文化論叢』18、1987
- 八幡村教育委員会「増築半古墳群発掘調査報告書」1981
- 八幡村教育委員会「『八幡寺古墳群発掘調査報告書』」1982
- 八幡村教育委員会「十三号墳発掘調査報告書」1979
- 八幡村教育委員会「中山12号墳・中田五郎塔群」1982
- 八幡村教育委員会「麻谷1号古谷古墳群」『八幡寺の遺跡』1978
- 松江市教育委員会「『八谷古墳群』」1981
- 山本清「神社・飛石古墳」「『奈良立つ風と云ふ文化的古風』」1975
- 山本清・杉江・井出平山古墳「鳥根県埋蔵文化財調査報告書」N. 1973、鳥根県教育委員会
- 鳥根県教育委員会「八谷古墳群」1993
- 松江市教育委員会「『八谷古墳群』」1985
- 松江市教育委員会「松江市立計画事業未完成区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」1983
- 松江市教育委員会「二ノ屋古墳群発掘調査報告書」1992
- 松江市教育委員会「『福谷古墳群発掘調査報告書』」1994

があり、これらはいずれも松山編年⁵のIV期に相当し、5世紀後半に位置付けられるものである。

この時期の群集墳の調査例は少なく、群全体を知り得る例は乏しいが、ここでは比較資料として調査が行われた主要な遺跡を挙げ（第3表）、本古墳群の特徴付けを行いたい。

(1) に関連して、基本的に古墳の築造に際して立地条件は大きな意味を持つと考えられ、支群を形成する中においては増福寺1号～5号墳のように尾根筋の条件の良い場所から構築される例が多い。一方で、尾根筋に余地が在りながら斜面に作られた長砂11号墳などの特異性も指摘されており⁶、立地条件からは一概に築造順序を判断できない危険性もはらんでおり、5～7号墳についても今後検討する必要があろう。

主体部については箱形と、割竹形もしくは舟底形の2系統が確認されている。後者に属す1号墳の墓域形態は平面が細長で蛇行し、小口部の立上りが緩やかなタイプで不整備な感が否めない。こうした例としては寺床2～4号墳、柴2号墳、敷居谷5号墳、長砂3号・7号・9号・11号・13号等が挙げられる。これらの時期は概ね山芸1期段階までに位置付けられ、2期の段階には単純な長方形プランの墓構や箱式石棺などが見られるようになる。もう一つ注目されるのは、1号・2号墳の主軸方向が墳丘の対角線上にあることで、今回集成した古墳についてもそうした例が少なからず認められる。こうした点については墳頂（溝内）出土上器との関連で祭祀形態の一つとする考えが示されており⁷、1号墳については南東墳裾部から土師器直口壺が出土している点で共通する。2号墳は遺物がないため判断しかねるが、3号墳からは溝内から原位置を留めた状態で十刹器高环が一括して出土しており、こうした出土状況は増福寺2号・23号・24号等に近似する。これらはいずれも主体部が残っていないため遺物との位置関係は定かでないが、溝内で祭祀が行われたことは確実であろう。このような視点で通覧すると墳頂・溝内からの高环、壺、椀、壺の原位置での出土例

が多く、埋葬施設との位置的関係はともかく墳丘上で行われた上器供獻行為⁵の他に、当該期に墳期・溝内においてもそうした祭祀が行われるようになったとも考えられる。

最後に、出雲とりわけ東部出雲地域においては伝統的に方系墳が築かれる傾向が強いことは從来から指摘されており、このことは群集墳の埴丘形態を見ても明らかである。翻って当群集墳について見た場合、意宇周辺部でありながら不確定要素も含めた12基の内の半数が円墳であることは興味深い。当地域において古式群集墳は概ね松山Ⅲ期末からⅣ期には出現しているようで、この時期に所謂初期須恵器を伴うものは柴、長砂古墳群だけである。同じ時期に築かれている寺床3号、増福寺3号、十井13号墳など意宇周辺部においてはそれを作う例が未だにない状況で、その次の段階に群集墳が拡散する傾向を見て取れる。こうした定形化した須恵器の出現期において方墳と円墳が混在し、両者に明らかに貧弱ながらも出土遺物に格差が認められる状況は注目される。全國的に古式群集墳は5世紀中葉には出現し、末頃には多くが円墳化するという汎日本的な動向において特殊な位置を占めていた当地域の中でこうした特徴を持つ群集墳の存在する意味は様々な問題を含んでいえると言える。

第2節 土塼墓・箱式石棺について

1号墳の北側に土塼墓3基（SK01、SX01・02）、箱式石棺1基（SX03）が群をなして古墳を囲むように斜面に直交して作られている。地山を整形した痕跡はなく、盛土も検出していない。

概要を整理すると、SX01・02は石蓋土塼墓で、内法の規模はSX01が長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.4m、SX02が長さ0.6m、幅0.26m、深さ0.44mを測る。ともに塚内足側から蓋壺のセットを置いているのが特徴である。SK01も同様に墓壙の足側から有蓋高壺5セットと直口壺1を一括で検出しており、遺体埋葬部分の規模は長さ約1.4m、幅0.42m、深さ0.4mを測る。SX03は内法で長さ50cm、幅18cm、深さ16cmを測る小箱式石棺で、新生児1人がやっと入れるべき大きさである。棺内から枕に使用したと考えられる坏身が出土していることから、遺体を入れたのは間違いないと思われる。棺外からは棺内の坏とセットの蓋が1点出土している。

遺物はSX03出土の蓋壺がやや新しく、出雲5期と考えられる他は全て出雲4期に相当し、群集墳との直接的な関連は考え難い。

これらの上塼墓・箱式石棺の分布を見ると、標高約30.5~31mにSX01・02が、標高約29~29.75mにSX03・SK01が作られており、やや離れてはいるもののそれぞれが並列している。また、規模について見た場合もそれぞれ大小セットの状態で、2基で1単位を形成していると考えることも可能であろう。これらが営まれた同時期に斜面では横穴墓の築造が開始されており、この事は同一丘陵において横穴墓と別系統の墓制が布かれていた事を意味する。これらが階層墓を示していることは間違いないと思われ、また箱式石棺、取り分け小形箱式石棺の性格についての問題提起もされており⁶、その背景や問題点については今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

第3節 横穴墓について

今回の調査で丘陵南斜面から未完成の1穴を含めて計15穴を検出した。横穴墓が穿たれた地盤が軟弱であったため天井部や側壁が崩落、剥落しているものが多く、玄室形態については不明な点が多い。また、盜掘若しくは別の理由による遺物の出しし行為があった様で、玄室内に全く遺物が

残っていないものが半数近くの6穴にものぼる。本節では今回調査した横穴墓を再整理し、安来道路西地区で調査された同じ東出雲町の島田遺跡⁷（以下島田）、島田池遺跡⁸（以下島田池）の横穴墓と併せて若干の検討を加えてまとめとしたい。

時期と形態 築造時期は大谷編年に従えば、出雲4～6期までと言え、3期まで遡る遺物は検出していない。各時期に構築された数では、群における導入期すなわち出雲4期に10穴が集中して桀かれ、5期に3穴、6期に1穴と下るに従いその数は減少する。各時期の横穴墓の形態的な特徴を明確にすることはできなかったが、ここでは時期ごとの横穴墓の様相を形態を中心に述べることとする。

（出雲4期）

この時期に該当するのは1号～3号・5号～7号・12号～15号穴である。4期の中でも出土須恵器に新古が認められ、横穴墓群中でも特に古く位置付けられるのは下段の15号、次いで12号穴と考えられる。長さ5m前後、幅1m程の狭短な墓道と前庭の両方が認められ、後者は長さが10m近くある広長なタイプと長さ6m前後の広短なタイプに分けられる。

墓道部が付く所謂意宇型はこの時期から既に出現しているが、下段の墓道タイプの横穴墓には見られず、古い段階では採用されていなかったとも考えられる。4期の中に画期があるとも見れるが、出土遺物・器種が少ないため、断言するのは危険であろう。

玄室プランは正方形、台形、横長の長方形が見られ、数的には正方形を呈すものが主流である。天井形態⁹はテント形、テント系家形が認められる。

閉塞には前庭部や墓道で検出したものも含めると円錐、割石、切石を使用しており、特に割石が多用されている点が目につく。

埋葬配置としては玄室左右壁に平行する継配置と、奥壁に平行する横配置が見られ、下段の横穴墓はすべて継配置である。この時期には須恵器床の他に石床を付設する石棺も出現している。

この時期は各横穴墓間に最も階層差が見られる時期で、方形の後背墳丘・石棺・直刀（残欠）・鉄鏃を保有する2号、墳丘は持たないが同様の副葬品を持つ5号が突出している。

（出雲5期）

この時期に該当する横穴墓は8号・10号・11号穴である。前庭部は前代の狭短なタイプが消え、広短なものと広長なタイプだけになる。また、この時期以降はすべて意宇型化する。

玄室プランは正方形、台形が見られ、天井形態は前代と変化しない。

閉塞には円錐、割石と切石が使用される。埋葬配置が判るものは11号穴のみで、継配置はこの時期にも見られる。

11号が直刀を持つのみで、ほかは遺存状態が悪く比較はできないが、4期のように突出した被葬者はいなかったと考えられる。

（出雲6期） この時期に該当するのは4号穴のみである。前庭部は長さ10m以上、幅が2mを測る長大なタイプとなる。

玄室は横長の台形プランを呈し、天井形態はドーム系家形と考えられる。

閉塞にはやはり凝灰岩割石を使用し、埋葬配置も床面に作り出された構造から継配置が採用されていたと考えられる。

以上、時期ごとの様相を述べたが特徴を整理すると以下のようなになる。

狭短な墓道は4段階のみで、5期以降は広短か広長な前部だけになる。蓋道が付く意字型もこうした変化に対応しており、5期以降には主流となるようである。

玄室は判断し得るものだけでテント形、テント系家形、ドーム系家形しか確認されなかった。不明なものが6穴あり、特に、最も古いと考えられる15号穴の形態が知り得ないため導入期の様相を考える上で決め手に欠く。ただ、ほぼ同じ時期と考えられる12号穴がテント形かテント系家形と考えられること、ドーム系が1穴であるのに比べて圧倒的にテント系を多く採用している傾向から、推測の域を出ないものの、導入期からテント系を強く指向していた可能性が高いと言えよう。

埋葬施設の配置については横配置をしているのは石棺を内蔵する2号・5号穴と3号穴のみである。当横穴墓群では出土4期には既に横配置が出現しており、縦配置は最も古い段階から6期まで一貫して見られる。

横穴墓の階層性は、4期には歴然としていたものが5期以降は不明瞭になる。

これらの特徴は後述する島田池の様相と対照的であると言えよう。

陶棺 1号横穴墓出土の須恵質亀甲形陶棺は貼付脚がない点、外面に無数の竹管文を施す点、製作技法が円筒棺の流れを持つ点等、畿内や岡山県に通有のタイプとは大きく異なる特徴を持つ。また、基本的に亀甲形は土師質、須恵質は屋根形（家形）の場合がほとんどであることもその一つと言えよう。竹管文を施した例を県外に求めると、菅見の限りでは岡山県岩田8号墳⁴出土の1点だけである。しかし、岩田8号は身を粘土板の組み合わせで作り、蓋も板状であることなどから関連性は弱いと考えられる。県内出土の陶棺は特殊土器と言われるものも含めると、今のところイガラビ1号墳、大井1号墳、池ノ奥C遺跡、池ノ奥塗跡群⁵、島田ちょう塚横穴墓⁶、吉佐出土陶棺が報告されている。大井地区出土の破片は畿内や岡山に見られるような定形化したものではなく、合子状や円筒状のものなどバラエティに富むが、すべて大井の窯で製作されたものと言える。一方、安来市で出土している2例はいずれも土師質で、吉佐出土例については詳細は不明であるが、島田ちょう塚出土の陶棺脚は一般的な岡山型ないしは畿内型と考えられる。1号穴出土例は後者の一群とは様相が異なる。このことは山陰出土陶棺の分布状況（第145図）に如実に表われており、今のところ安来市の伯太川以東には畿内型や岡山型の影響を受けたものが多く、当地域周辺からそうしたタイプは未だに例を見ない点が注意される。

このように比較すると、1号穴出土陶棺は技法や形態の特殊性などの特徴が極めて大井的で、また、7世紀初頭頃の池ノ奥2号墳の周溝から出土した円筒棺も製作技法上特に注目される⁷。陶棺



の被葬者が須恵器製作集団と深い関わりのある集団に属する人物であったことは間違いないが、横穴墓群の中で単独で立地している点等からも他の被葬者とは性格の異なる存在であったことが窺えよう。

石棺 2号穴から灯明台石を有する石棺1基（以下2号石棺）、5号穴から1基（以下5号石棺）を

第4表 山陰の陶棺出土地一覧表

No	所在地	出土遺跡	土師	鍋窓	形式	備考
1	鳥取県八東郡東出雲町	造山池1号横穴墓	○	亀甲形		
2	松江市大井町	イガラビ1号墳	○	特殊?	破片多段	
3	松江市大井町	大井1号墳	○	特殊?	破片	
4	松江市大井町	大井C塚跡	○	特殊	破片多段	
5	松江市大井町	池ノ奥窓跡群	○	特殊?	破片	
6	安来市島田	島田ちょう塚横穴墓	○	亀甲形?	脚部	
7	安来市古佐	不 ^明	○	不 ^明		
8	鳥取県米子市高岡町	不 ^明				詳細不明
9	日野郡日野町	不 ^明	○?			詳細不明
10	西脇郡今治町	寺内8号墳	○	亀甲形		
11	西伯郡宍道町	不 ^明		不 ^明		
12	西伯郡宍道町	小町	○	屋根形		
13	東伯郡東郷町	不 ^明				詳細不明
14	八頭郡河原町	不 ^明	○	屋根形		
15	岩美郡吉田町	不 ^明				詳細不明
16	岩美郡福那村	藏見2号墳	○	屋根形		
17	岩美郡福那村	藏見3号墳	○	屋根形		
18	岩美郡岩美町	不 ^明	○	屋根形		
19	鳥取県浜坂	鬼神山横穴墓	○	不 ^明		
20	鳥取市久木	古墳	○			詳細不明

に加工した袖石を有する点など、基本的に2つの石棺は構造上の共通点が多いといえる。後期家形石棺の各部位の型式分類や地域性、変遷、分布については大谷氏によって既に示されており⁶、前述した特徴については安来平野の特徴を備え、意字中権とは異なった地域色であるとしている。

ここで、2号棺の敷石との間に設けた仕障の形態について見ると、僅かながらも浅い抉り込みを施していることから、床石と別材の仕障についてはU字状の削り込みを持つタイプの他に、単純なタイプと上面に浅い抉り込みを施して立面舟底状に仕上げるタイプの3分類が可能と考えられる。5号棺は仕障が損なわれているが、先にあげた2号棺との類似性から同様の仕障が備えられていたものと推測される。仕障に浅い抉り込みを持つ例としては、安来市の宮内II-1号横穴墓⁷、高広IV-1号横穴墓出土石棺⁸があり、この2例はいずれも仕障中央部に比べ両端が僅かに反り上がりしており、2号棺と同じ作りと言える。このタイプの仕障を考える上で注目されるのがJ字形仕障である。近年調査された白コクリF-1号、2号穴からU字状の削り込みを施した仕障を持つ石棺が検出されていることから、U字形仕障が必ずしも馬橋川・意宇川流域のみに採用されたわけではないことが判ってきている⁹。特に注目されるのが白コクリF-1号棺で、U字形仕障の他にL字形に加工した袖石も備えていることである。大谷氏の指摘通りJ字形袖石は基本的に意宇川下流域の地域性と考えられるが、こうした袖石や抉りを施す仕障を備える石棺が安来にも見られることは、九州から導入された意匠、すなわち石棺横口部のU字形・擬U字形加上がアイデンティティー表現のバリエーションの1つとして広範囲に取り入れられていたことを示すものと考えられる。

一方、灯明白台石を付設する島田池遺跡I-1号穴出土の家形石棺は出雲5期に後出するものではあるが、敷石を備える点では共通するものの、袖石を持たないこと、仕障が単純なタイプであることなど近在しながらも形態の相違が認められ、前述した横穴墓の様相の違いとも関連して考える必要がある。

なお、5号棺の側壁及び奥壁に見られるような断面J字形に抉りを施す特徴は、東出雲町出雲郷の栗坪1号墳石棺式石室にも観察される。奥壁・側壁の底部の内側を抉り込んで床石を挟み込んでおり、先後関係は不明だが、両者が同一の工人集団によって作られたと考えることができる。

検出している。遺物の年代からは両者に時期差はないと思われる。2基の石棺を比較して見ると、蓋石頂部の形態や側壁及び袖石の組方に若干の違いが見られるものの、石棺の手前に敷石を設ける点、敷石側壁を設ける点、立面略J字形

甕について

今回の調査で出土した大量の甕片について整理を行う過程で若干の知見が得られた。横穴墓墓道もしくは前庭部に散布した状態で検出した甕片は、埋葬に伴う何らかの儀礼行為によって近接する複数の横穴墓に撒かれたと考えられ、9号横穴のように墓として機能する前にも何らかの理由で同様の行為がなされていることが明らかになった。

また、同一個体の出土層位を横穴墓ごとに見ると、必ずしも1個体が破碎された後一度に散布されていないことが分かる。これは同一個体の破片包含層が複数認められたり、焼造時期が明らかに異なる横穴墓に同一個体が見られ、自然堆積では起こり得ない現象と考えられるからである。また、複数の横穴に散布された甕片の数を検討すると、数的に圧倒的に多い横穴が認められ、破碎がそこで行われた可能性も考えられる。甕片出土総数については2~4号横穴墓が圧倒的に多く、これは破碎散布された個体数、大きさに拠ると考えられるが、なぜこれらの横穴墓に多くの個体数の甕が散布されたのか疑問点として残る。

東出雲町で調査された横穴墓について

今回の東出雲町における安来道路建設に伴う発掘で、渋山池古墳群で15穴、鳥田遺跡で3穴、鳥田池遺跡で36穴の計54穴もの横穴墓が調査された。比較的密集して分布するこれらの横穴墓が調査

第5表 渋山池古墳群（横穴墓群）出土遺物一覧表（時期は大谷編年）

遺 構	甕 完成 器											上 頭 盔		無 製 品		装 身 具		基 本 時 期								
	完形・破 片											完形・破片														
	坏	底	長	合	部	は	縫	半	横	短	長	直	彎	大	その	裏	坏	直	刀	鐵	そ の	耳	勾	ガラス	その	
	蓋	身	脚	脚	高	高	脚	脚	脚	脚	脚	金	金	金	金	底	身	直	刀	鐵	そ の	耳	勾	ガラス	その	
1 玄 号	8	8	1	1	1	1	1	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
1 玄 前	1	2	2																						4	
2 玄 号	7	7																	1	1	9		1		4	
2 玄 前	7	8	1	1	1	1				1	4	6		2	2				1	1	9		1		4	
3 玄 号	1	1																	1	2	1	2			4	
3 玄 前	2	7								3	6			1					1	2	1	2			4	
4 玄 号																									6	
4 玄 前	8	7					1	1		1	1	1	1	3	1											6
5 玄 号	2								2								1	1	2	2	1	2	2	2	2	6
5 玄 前	1	1					1	1		1	2	1		1												4
6 玄 号	8	6	1				1			1	1								1	1	1	1				4
7 玄 号	1	5																								4
8 玄 号	4	2							1																	5
9 玄 号																										不 明
10 玄 号																										5
11 玄 号	4	8							2										1	1	1	1				5
11 玄 前	2	7					1	1		1	1			1	1			1	1	1	1	1	1			5
12 玄 号	9	11	2	1	2	1	1	2	2	5	2		2	2	2				2	2						4
12 玄 前	2	1					1	1	1	1	1		1	1	1											4
13 玄 号		1																	1	1						4
14 玄 号		2																								4
14 玄 前		2																								4
15 玄 号	9	12	3	1			2			3	1								1	1	2	1				4
15 玄 前	2									1																4

第6表 安来道路西地区で調査した横穴墓一覧表（時期は大谷編年）

横穴墓名	玄室形態	後退	開口方法	後背 塗瓦 埴瓦	出土 銀 水器 鎌								馬 刀 鉢 刀 子 真 理 飛 拂	文 字 の 記 録	備 考	
					3	4	5	6	A	B	7	8				
浜山池1	章字	削石			○	○					○		○	○		陶棺、抵抗器
浜山池2	チンド形	章字	切石2枚	方	○	○				○	○	○	○	○		灯明白石付家形石棺
浜山池3	チ系家形	章字	削石		○	○					○	○	○	○		鉢
浜山池4	マ系家形？	章字	削石			○	○	○								家形石棺
浜山池5					○	○	○				○	○	○	○		
浜山池6	チ系家形	章字	削石			○	○	○								
浜山池7	チ系家形	削石			○	○	○									
浜山池8	章字	削石			○	○										
浜山池10	チ系家形	章字	削石		○	○										
浜山池11	チ系家形	章字	7段・切石1枚		○	○				○	○					須恵器
浜山池12	チ系家形	削石			○	○					○	○				
浜山池13		削石			○	○										
浜山池14		削石			○	○										
浜山池15		内壁			○	○					○	○				
島田1	チ系家形	章字	切石3枚				○	○					○	○		鏡軒、家形石棺、石碑
島田3	豊永家形	章字	切石3枚					○								
島田4	ドーム形	章字	切石3枚				○	○			○					石床
島田池1-1	チ系家形	章字	切石2枚	不明	○	○		○	○	○	○	○	○	○		家形石棺、須恵器
島田池1-2	チ系家形	削石	後方		○	○					○	○	○	○		弓全舟、鉢斧、須恵器
島田池3A		削石			○	○					○					
島田池1-33	ドーム形	章字	切石2枚		○	○										鏡軒、鉢軒、須恵器
島田池1-3C	チ系家形	章字	削石			○										
島田池4-1	ドーム形	章字	切石2枚		○	○										
島田池4-5	ドーム形	章字	削石		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		須恵器
島田池4-6	ドーム形	削石			○	○					○	○	○	○		須恵器
島田池4-7	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-8	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-9	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-10	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-11	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-13	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-14	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-15	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池4-16	ドーム形				○	○					○	○	○	○		
島田池5-1	ドーム形	削石	方		○	○					○	○	○	○		
島田池5-2	ドーム形？	削石	○		○	○										
島田池6-1	ドーム形				○	○										
島田池6-2	ドーム形				○	○										鏡軒
島田池6-2	ドーム形				○	○										鏡軒
島田池6-3	ドーム形？	削石？			○	○										
島田池6-4	チ系家形	章字	切石2枚		○	○					○	○	○	○		須恵器
島田池6-5	チ系家形	章字	切石2枚	方	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		弓全舟
島田池6-6	ドーム形	削石	方		○	○					○	○	○	○		
島田池6-7	チ系家形	章字	切石1枚	後方	○	○					○	○	○	○		鏡
島田池6-8	ドーム形	削石	方		○	○					○	○	○	○		
島田池6-9	チ系家形	章字	切石2枚		○	○					○	○	○	○		石床
島田池6-10	チ系家形	削石	1枚		○	○					○	○	○	○		弓全舟
島田池6-11	ドーム形	章字	切石2枚		○	○					○	○	○	○		
島田池6-12	ドーム形	削石1枚	方		○	○										
島田池6-13	ドーム形				○	○	○				○	○	○	○		須恵器
島田池6-14	ドーム形？	切石2枚			○	○					○	○	○	○		須恵器

されたことは、当地域の後期～終末期の墓制あるいは社会の様相を解明していく上で多くの資料を提供する結果となった。ここではこれらの調査結果を整理し、それに基づき当地域における横穴墓の様相を概観して総括したい。

不明なものを除き、浜山池、島山、島田池の横穴墓を整理すると第6表のようになる。

浜山池の横穴墓の時期ごとの様相については前述した通りである。島田については、出土遺物が少

ないが、1号・4号は出雲6B期に築造されたもので、更にやや遅れて3号穴が築造されたと考えられる。全て閉塞には切石を使用し、意字型化しているが玄室の天井形態はそれぞれ異なる。遺物は何らかの理由で持ち去られた可能性が強く、1号穴が家形石棺、4号穴が異形石床を内包する点以外に特に目を引く遺物は残存していない。

島田池は築造された数も多く、遺物も良く残っていることから、そのあり様の特徴が顕著に認められることが指摘されている。この場合、横穴墓の導入期は出雲3期で、当該期の横穴墓は5穴認められる。いずれも天井形態はドーム形を呈す。遺物を見ると、報告にもあるようにこの時期の武器類は鉄鎌のみで、後背墳丘を持つ横穴墓は基本的に鉄鎌を副葬しており、武器を持たない横穴との階層差が読み取れるが、安来市鷲の湯病院跡横穴墓や宮内II-1号のように際立った横穴墓は確認されていない。

4期になども基本的に横穴形態の状況は維持され、19穴中の16穴がドーム形で上流である。この中においてテント系家形の1-2号、6-7号・10号が後背墳丘を持ち、馬具・大刀・鉄鎌多数を副葬している点で他の横穴墓に比して有力な存在であったことが明らかになっている。取り分け1-2号は水晶製三輪玉付きの装飾大刀、銀象嵌入頭大刀を出土している点で他を圧倒していると言えよう。

5期になると、一般的な傾向として3期には出現する意字型がこの時期になってようやく認められるようになるが、依然として玄室の天井形態には半数がドーム形を採用している。4期と同様に後背墳丘・家形石棺・大刀・馬具を持つ1-1号を筆頭に、後背墳丘・大刀・子持ち壺を出土している6-5号などが天井家形で優位にあるほかは、すべて武器を持たないという明瞭な階層差が認められる。

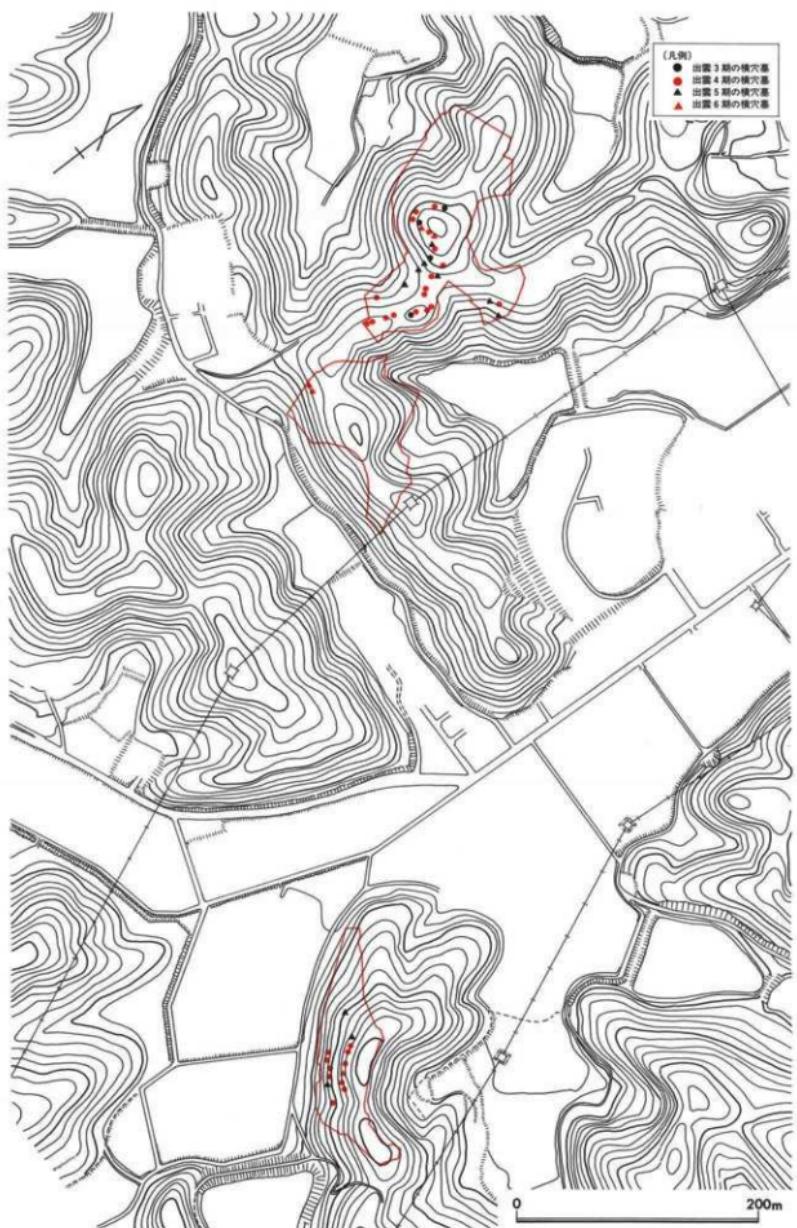
6A期に築造される横穴墓数は3穴と少ないが、やはりドーム形は継続して見られる。大刀・子持ち壺を出土しているテント系1-3C号は4・5期ほど明確さを示さないものの、依然として鉄鎌を保有しない他の横穴墓との格差は歎然と認められる。

以上のように各横穴墓群ごとの時期ごとの様相を大まかに見ると、当地域の様相を次のように整理することが可能であろう。

横穴墓の導入期すなわち出雲3期には、島田池において狭短な墓道を持ち、天井ドーム形態の横穴墓が構築され、近隣では横穴墓は構築されていない。また、この段階では後背墳丘を持ちながらも鉄鎌を保有しないなど、各横穴墓間に大きな階層差は認められず、副葬品を見る限り突出して有力な被葬者も窺い知ることはできない。周辺部の当該期の横穴墓には東出雲町掛屏の高井1号穴、同町出雲郷の古城山1号穴が知られるのみで、いずれも際立った遺物を作っておらず、ごく限られた階層の被葬者のみに許された墓制でありつつも、この地域を治めていたと考えられる古墳被葬者層とは明確な差を付けられていた状況が想定される。

こうした見方に誤りが無ければ、横穴墓導入期の様相は安来地域のそれとはかなり異なったものと言え、その背景には意字中枢の周辺部により強い支配が及んでいたことが考えられる。

出雲4期になると一転して横穴墓の数は爆発的に増加し、渋山池も新たに墓域として機能し始める。島田池においては玄室形態に依然として前代のドーム形を採用する横穴と、家形を新しく取り入れ副葬品も馬具や大刀を持つなど墓群内における階層分化が認められるのに対し、渋山池では後背墳丘・石棺・直刀を持つ2号穴、石棺・直刀を持つ5号穴など墓群内での階層差は認め得るが、



第146図 安来道路西地区で調査した横穴墓分布図

馬具を所有するものは無く、既に意字型化し且つ天井形態も齊一的にテント系を指向した形跡が認められるなど、両者には大きな違いが見受けられる。

出雲5期・6期になると両者の違いはより明白で、島田池では武器を全く持たないものと、1-1号、6-5号、1-3C号などの有力な被葬者がより明確であるのに対し、他方は11号が直刀を出土しているのみで貧弱な感は否めない。6期に突如としてドーム系家形と考えられる大型の4号穴が出現するが、残存するのは須恵器のみで安易な判断はできない。こうした状況から4期において洪山池では墓群内での階層差は認められるにせよ、5期以降は後背墳丘もなく取り立てて優位性を表す横穴墓は構築されていない可能性が考えられる。また、島田池と比較した場合、その優劣は明らかである。6期以降に築造される島田1号・4号・3号穴は遺跡としては島田池と丘陵統きで、その間にもいくつか未発見の横穴墓があるものと推定される。時期がかなり新しく、あるいは島田池の造墓集団の墓域が移行したものと考えることも可能で、そのように想定した場合、かなり長期に亘って石棺を内包する有力者の横穴墓が造られ、最も豪華な整正家形の3号穴まで継続して造られたと考えることもできよう。洪山池と島山・島田池の横穴墓群の立地を見ると、谷を挟んで両者が対峙していると見えなくもない。2つの造墓集団の属性の違いを反映したものであろうか。

ところで安来地域においては、4期になると散在していた小地域の有力者の墓域が集中し、その墓域内で有力階層の平準化がされることで全体としては意宇平野周辺首長との格差が広げられたとの解釈も示されているが⁶、当地域においては意宇中核の周辺部ということもあり、このような各時期における横穴墓、横穴墓群の様相には複雑な背景があったものと考えられる。

以上、今回の調査結果と安来道路建設に伴い調査された横穴墓について、私見も交えて述べてきたが、資料の増加とともに新たな問題点も派生したといえ、これらについては今後さらに検討していく必要があろう。

註

- (1) 大谷見二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥取考古学会誌』11、1994
- (2) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『鳥取考古学会誌』8、1991
- (3) 鳥取県教育委員会「八色谷古墳群」1993
- (4) 八云村教育委員会「上井13号墳発掘調査報告書」1979
- (5) 松本岩雄「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』1996
- (6) 戸木雅博「前式石棺等一圓山以下を中心としてー」『山陰考古学の諸問題』1986
- (7) 鳥取県教育委員会「岸尾遺跡・鳥田遺跡」「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区V」1997
- (8) 鳥取県教育委員会「島田池遺跡・鶴賀遺跡」「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅲ」1997
- (9) 山陰横穴墓研究会「山陰の横穴墓—その型式・変遷・地域性」1997
- (10) 岡山県山陽町教育委員会「岩田古墳群」「岡山県當山陽新住町市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(6)」1976
- (11) 松江市教育委員会「船田遺跡・朝霧荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C・D遺跡・池ノ奥A遺跡・池ノ奥空跡群」「松江東工業園地内発掘調査報告書」1990
- (12) 『安来市誌』1970
- (13) 註(11)と同じ
- (14) 大谷見二「出雲の古墳時代後期の切石石棺」『第23回山陰考古学研究集会 古墳時代後期の棺—家形石棺を中心に—』1996
- (15) 鳥取県教育委員会「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV(越畠遺跡・宮内遺跡)」1993
- (16) 鳥取県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1984
- (17) 鳥取県教育委員会「岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区)」「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13」1997
- (18) 註(17)と同じ

第6章 自然科学的分析

(1) 渋山池古墳群IV区横穴墓群出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室

井 上 晃 孝

島根県東出雲町の渋山池古墳群・IV区横穴墓群は15横穴から成り、その内人骨が出土した横穴墓は8横穴であった。

確認された被葬者数は32体であった。

以下、各横穴毎に出土人骨の概要を報告する。

歯牙は下記の略号で記載した。

○	：釘植歯牙	γ	：歯根のみ
○'	：埋伏歯	△	：遊離歯牙
×	：欠（歯槽開放）	C	：齶齒
□	：欠（歯槽閉塞）	//	：折損部位

最後に、渋山池古墳群IV区横穴墓群出土人骨一覧（付表）にまとめた。

【1号横穴墓】

玄室左側から中央部にかけて須恵器土器と人骨が多数散在していた。

玄室右側には、右側壁に沿って完形の陶棺（須恵質製）があり、中に極めて若干の人骨片が検出された。

A. 玄室左側～中央部にかけての人骨群

1. 骨の遺残性

玄室左側～中央部にかけて、散乱した人骨の遺残性は不良、破損骨や脆弱化した骨が多数で、完形骨は少ない。

2. 遺残骨名とその部位

玄室左側～中央部にかけて、人骨が多数散在、骨の採取番号はNo.1～37に達した。これらの骨を個体別に識別不可能だったので、主要骨から個体数、性別、年齢と身長を推定した。

1) 頭蓋骨

①頭 骨：No.1（頭頂部、側頭部の一部と上顎部の一部）

歯 牙：

$\frac{\Delta}{6}$	$\frac{\circ}{// 3 // 2 1}$	$\frac{\triangle \triangle \triangle \triangle}{3 4 5 6 // 7 // 8}$	$\frac{\circ}{}$	$\frac{\triangle}{}$
--------------------	-----------------------------	---	------------------	----------------------

②頭 骨：No.32（頭頂部）

③頭 骨：No.35（頭頂部）

2) 主要骨の個数、性別と個体数

骨名	採取N o.	左右	部位	性別	個体数	
頭骨	1		頭頂部、側頭部、上顎部	♀	♂ 2	3
	32		頭頂部	♂ (?)		
	35		頭頂部	♂ (?)	♀ 1	
大腿骨	13	左	近位～骨体	♀		4
	16	左	ほぼ完形、41.0cm ほぼ完形、41.5cm	♂	♂ 2	
	29	右				
	27	左	脆弱化、44.5cm	♂	♀ 2	
	33	左	骨体	♀ (?)		
脛骨	5	右	骨体	不明		3
	12	不明	骨体	♀	♂ 1	
	17	右	骨体～下端部	不明	+ (1)	
	28	左	ほぼ完形、35.0cm	♂	♀ 2	
	31	右	骨体	♀ (?)	(1)	

3. 個体数（被葬者数）

2) 主要骨の個数、性別と個体数で示したように

頭骨：3体分（♂2、♀1）

大腿骨：4体分（♂2、♀2）

脛骨：3体分（♂1、♀2）

頭骨が3個体遺残していることから3体確認、大腿骨は5個遺残、形態学的特徴から♂2、♀2の4体が確認された。脛骨は5個遺残（左1、右3、不明1）で、♂1、♀2の3体が確認された。

消失骨や不明骨もあるが、以上から、玄室左側～中央部にかけて散在する人骨の個体数は4体が推定される。その内訳は、大腿骨と脛骨の形態学的特徴を加味すると、♂2体と♀2体の可能性が高い。

4. 推定身長

♂2体の身長は、現場での計測値から、1体（大腿骨N o.27）はピアソン法^aで164.9cm、藤井法^bで164.8cmであった。もう1体は（大腿骨N o.16、29）はピアソン法で159.3cm、藤井法で157.1cmであった。♀2体の身長は不詳である。

B. 玄室右側、陶棺中の人骨

1. 骨の遺残性

陶棺内には、若干の人骨が遺残、遺残骨数は3個、破損骨のみで、遺残性は不良である。

2. 遺残骨名とその部位

歯牙：遊離歯牙 破損歯冠部（乳齒、歯種同定不能）

下肢骨：大腿骨、左；骨体の一部

足 骨、左；足根骨の一部

3. 推定性別

遺残骨をみる限り、未熟な小児骨で破損骨であるので、性別不詳である。

4. 推定年齢

遺残骨の位置関係（伸展葬）から、身長は現場での計測値から、大約120cm位と推察される所から、10歳未満（7～9歳）の小児が推定される。

5. 推定身長

遺残骨の位置関係（仰臥伸展葬）から、身長は大約120cmと推定する。

6. その他

本屍の左大腿骨がやや外側に開脚していることから、埋葬時は左下肢はタテヒザであった可能性が高い。

C. まとめ

IV区 1号横穴墓の被葬者は

A) 玄室左側～中央部にかけての一帯に人骨多数散在

B) 玄室右側の陶棺中の人骨若干

の2群に大別される。

A) 玄室左側～中央部にかけての一帯の人骨

精査すると、被葬者は4体であった。内訳は♂2体と♀2体であった。♂2体の推定年齢はともに壮年期、推定身長は1体は164.9cm、もう1体は159.3cmであった。

♀2体のうち、推定年齢をみると、1体は壮年中期（30代）、もう1体は青年～壮年前期（20歳前後）位で、推定身長は2体とも不詳である。

B) 玄室右側、陶棺中の人骨

陶棺内には、未熟骨が若干遺残していた。

被葬者は小児1体で、年齢は10歳未満（7～9歳位）、身長は大約120cm位が推定される。

[2号横穴墓]

玄室最奥部に石棺があり、その中の石室内に人骨群が散在（A地点人骨群）、その石室前部に一群の人骨が集骨状または散在（B地点人骨群）していた。

A、B地点の人骨は、搅乱状態で、骨の遺残性はやや不良であった。

確認された被葬者数は5体で、♂4体と♀1体であった。

1. 骨の遺残性

A地点とB地点の人骨群は、搅乱状態で、その上頭骨は破片化して識別不能であった。

被葬者5体の遺残性は、いずれもやや不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

A地点の人骨採取番号は1～29、B地点の人骨採取番号は1～37に及んだ。

A地点とB地点の人骨群は、それぞれ独立した人骨群ではなく、A地点とB地点の人骨は搅乱状態を呈し、これらの骨を個体別に識別することは不可能であった。

そこで、遺残性のよい主要骨から被葬者数、性別、年齢と身長を推定した。

1) 下顎骨 5個

①A-4 (♀)

$\overline{J J 4 3 2 1 | 1 2 3 \times \times J J}$
 $\gamma \gamma \gamma \gamma \gamma \gamma$

②A-6 (♂?)

$\overline{J J 7 6 \times \times \times \times | \times \times \times J J}$
 $\circ \circ$

③A-23 (♂)

$\overline{J J \times \times \times \times \times | \times \times \times 4 5 6 7 J J}$
 $\circ \circ \circ \circ$

④A-24 (♂)

$\overline{\times 7 6 5 \times \times \times | \times \times 3 \times \times \times \times J J}$
 $\circ \circ \circ \circ$

⑤B-4 (♂)

$\overline{7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 8}$
 $\circ \circ \circ$

2) 下肢骨の個数、性別と個体数

骨名	採取No.	左 右	部 位	性別	個体数
寛 骨	A-5	右	腸骨粗面、大座骨切痕	♀	♀ 1 ♂ 4 5
	A-12	左	腸骨大座骨切痕、臼窩	♂	
	A-16	右	腸骨大座骨切痕	♂	
	B-7	左	腸骨大座骨切痕	♂	
	B-15	右	腸骨大座骨切痕、臼窩	♂	
	B-16	右	腸骨後、臼窩	♂	
	B-19	右	腸骨大座骨切痕、臼窩	♂	
	B-24	左	腸骨大座骨切痕	♂	
大 腿 骨	A-1	右	ほぼ完形 38.0cm	♀	♀ 1 ♂ 4 5
	A-9	左	骨体～下端部	♀ (?)	
	A-13	右	骨体中央部	♂	
	A-14	左	骨体中央部	♂	
	A-15	不明	骨体	♂ (?)	
	B-9	左	下端部	♂	
	B-13	右	ほぼ完形 39.0cm	♂	
	B-17	右	近位部	♂ (?)	
	B-20	左	近位～骨体上部	♂	
	B-21	左	ほぼ完形 40.0cm	♂	

3. 個体数（被葬者数）と性別

前項で示したように

1) 下顎骨 5個

下顎骨の形態と歯冠径らを考察して、♀ (?) 1、♂ 4

2) 寛骨 8個

♀ : 右 ; 1 1

♂ : 左 ; 3
右 ; 4) 4

3) 大腿骨 10個

♀ : 左 ; 1
右 ; 1) 1

♂ : 左 ; 4
右 ; 3
不明 ; 1) 4

以上から、被葬者は5体（♀ 1、♂ 4）である。

4. 推定年齢

本横穴の被葬者の頭蓋骨は、いずれも骨片化しており、年齢推定はできない。

大腿骨は、男性骨の場合、骨体中央部の形態からして、成人域に達し、恐らく壮年期以上である。

寛骨は、恥骨結合面が欠落しているので、年齢推定できない。

女性の大腿骨は小さく、細く、きやしゃで成人骨ではない。下顎の歯牙はいずれも歯根のみで、年齢推定しえない。恐らく女性骨の年齢は青年期位と推察する。

男性の下顎の歯牙の咬耗度から

♂1 (A-6) : 壮年期位

♂2 (A-23) : 壮年後期位

♂3 (A-24) : 壮年期位

♂4 (B-4) : 壮年中期位

が推察される。

5. 推定身長

女性の右大腿骨 (A-1) 長から、身長はピアソン法で139.5cm、藤井法で146.2cmである。

男性4体の内、大腿骨長が計測できたのは、2個にとどまった。

右 (B-13) と左 (B-21) の2個の大腿骨は、その形態からして、恐らく別人由来と推察される。

しかし、下顎骨と大腿骨を個体別に識別不可能であるので、男性4体の内のいずれかの2体の身長推定にとどまった。

♂ (B-13) の身長

ピアソン法 : 154.6cm

藤井法 : 151.2cm

♂(B-21)の身長

ピアソン法：156.4cm

藤井法：153.6cm

まとめ

IV区2号横穴墓の玄室中央の最奥部に石棺があり、その石室に人骨群が散在(A地点人骨群)、その石室前部に一群の人骨が散在(B地点人骨群)していた。

A地点とB地点の人骨群は、攪乱状態で、個体別に識別しえなかつた。

被葬者は5体で男性4体、女性1体であった。

♂1の推定年齢は壮年期、♂2の推定年齢は壮年後期、♂3の推定年齢は壮年期、♂4の推定年齢は壮年中期位であった。

♂4体の内、2体の推定身長はピアソン法で154.6cmと156.4cmであった。他の2体の身長は不詳であった。

♀の推定年齢は青年期位、推定身長はピアソン法で139.5cmであった。

[3号横穴墓]

3号穴には人骨が多数散在していた。

玄室入口からみて、左側やや中央部に散在する一群の人骨を1号人骨、左側最奥部に集骨状になつた一群の人骨を2号人骨、玄室中央奥部に散在する一群の人骨を3号人骨、玄室右側奥部に散在する一群の人骨を4号人骨、玄室右側人口部に散在する一群の人骨を5号人骨と仮称した。

これら5体の被葬者の骨の遺残性は、いずれも不良であった。

後世の攪乱がみられた。

1号人骨

1. 骨の遺残性

骨の遺残骨数はきわめて少なく、完形骨もない。遺残性はきわめて不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：頭頂骨の一部

下肢骨

脛骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3. 推定性別

遺残骨数が少なく、性的特徴を示す部位が少ない。しかし、頭骨の頭頂部の厚さが厚いこと、脛骨の骨体がかなり頑健で、筋付着部の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨が推定される。

4. 推定年齢

遺残骨に年齢推定する部位が遺残していない。あえて推察すれば、脛骨の骨体中央部が大きく、周径(骨体最小周長)も成人域に達していることから、本屍骨は成人域に達し、壮年期位が推察される。

5. 推定身長

遺残する左右の脛骨は破損骨であるので、本屍の身長は不詳である。

2号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は破損骨が多く、遺残骨数も少なく、骨の遺残性は不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頸骨の一部（右眼窩下縁部）

脊椎骨

腰椎骨：1ヶ、ほぼ完形

上腕骨

前腕骨：不明；橈骨か尺骨片

下肢骨

寛 骨：右；腸骨体の一部

大腿骨：左；近位～骨体

右；骨体中央部

脛 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3. 推定性別

遺残する寛骨（腸骨体）の厚さ、下肢の大転骨と脛骨の骨体がかなり大きく、頑健で筋付着部の粗面の発達が良好であるので、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残する脊椎骨の腰椎骨椎体前縁の上、下縁に中等度の骨棘形成がみられることから、本屍骨の年齢は熟年期（40代～）が推定される。

5. 推定身長

本屍の遺残する四肢骨に完形骨がないので、本屍の身長は不詳である。

3号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨数は本横穴中、最も多かったが、完形骨もなく、遺残性は不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：右顎骨、上顎骨、蝶形骨、頭蓋底部（咽頭結節）、後頭骨

下顎骨：左下顎体の一部～右下顎体

歯牙 2個釘植

歯 牙：	$\frac{6}{7}$	$\frac{6}{7}$
	II 7 6	II
	○○	

上肢骨

肩甲骨：左；肩甲棘部

上腕骨：不明；骨体中央部 骨片

尺 骨：右；骨体 骨片

桡 骨：不明；骨体 骨片

下肢骨

大腿骨：左；骨体 骨片

右；骨体 骨片

脛 骨：左；骨体 骨片

右；骨体 骨片

3. 推定性別

本屍の遺残四肢骨はいずれも小さく、細くきゃしゃである。歯牙の歯冠径も小さく、口蓋巾も狭いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残頭骨後頭部の人字縫合は軽度の融合、口蓋縫合の切歯縫合は完全融合、歯牙の咬耗度はプロカーラの2度であるので、本屍骨の年齢は壮年後期～熟年期（40代）が推定される。

5. 推定身長

本屍の遺残する四肢骨に完形骨がないので、身長は不詳である。

4号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は頭蓋骨1個のみで、完形骨ではなく、遺残性はきわめて不良である。

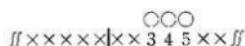
2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：左右の頭頂部

上顎骨、歯牙3個体釘植

歯 牙：



3. 推定性別

本屍の遺残歯牙の歯冠径が小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残頭骨頭頂の矢状縫合部離開、縫合部は鋭利な鋸状、口蓋縫合の切歯縫合は外側部は融合、内側部は未融合である。歯牙の咬耗度は軽微でプロカーラの1度である。以上から、本屍の年齢は壮年前期（20代）が推定される。

5. 推定身長

遺残骨は頭骨のみであるので、本屍の身長は不詳である。

5号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は未熟（幼若）骨で、遺残骨数も少なく、完形骨はない。遺残性は不良である。しかし、下顎の乳歯と永久歯が多数検出された。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂骨片 若干

下顎骨：右下顎体（下顎底部開放）、歯牙 4 個釘植

歯 牙：

II	6	E	D	C	II	2	1	2	D
	○	○	○	○	△		△	△	△
7	5	4	3				3	4	5
○	○	○	○				○	○	○
△	△	△	△				△	△	△

上肢骨

上腕骨：不明；骨体、骨片化

下肢骨

大腿骨：左；骨体、骨片化

3. 推定性別

本屍骨は未熟（幼若）骨で、歯牙の萌出状態から小児（7～8歳）位が推定される。一般的には、小児の場合、性別は不詳である。

4. 推定年齢

本屍骨は未熟（幼若）骨で、骨の遺残性は不良である。遺残歯牙を精査すると、上記のように、乳歯萌出、永久歯の第一大臼歯、中切歯と側切歯は萌出しているが、他の永久歯は未萌出の状態にあった。これから、小児の年齢は7～8歳位が推定される。

5. 推定身長

本屍骨に完形の四肢骨がないので、身長は不詳である。しかし、しいて云えば、小児の年齢は7～8歳位が推定されることから、身長は約110cm位が推察できる。

ま と め

IV区3号横穴墓には、被葬者5体（1～5号人骨）が埋葬されていた。

内訳は♂2体、♀2体と小児1体である。

各被葬者の遺残性は、いずれも不良であった。

1号人骨は♂、推定年齢は壮年期、身長不詳である。

2号人骨は♂、推定年齢は熟年期（40代～）、身長不詳である。

3号人骨は♀、推定年齢は壮年後期～熟年期（40代）、身長不詳である。

4号人骨は♀、推定年齢は壮年前期（20代）、身長不詳である。

5号人骨は小児（性別不詳）、推定年齢は7～8歳、身長不詳（約110cm）である。

後世の搅乱が認められた。

[5号横穴墓]

玄室や左側中央部に、頭骨2個と若干の四肢骨が検出された。玄室入口からみて、奥の方の頭骨を1号人骨、手前の頭骨を2号人骨と仮称する。骨の遺残性は、いずれも不良であった。

1号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は頭骨と若干の上、下肢骨のみで、遺残性は不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：前頭部、頭頂部、後頭部、右側頭部、左上顎部

下顎骨：下顎体折損

歯牙：

X	6	5	4	3	2	1	X	X	3	4	5	6	7
○	○	γ	γ	γ	γ				○	○	○	○	○

上肢骨

鎖骨：不明；骨体 骨片

上腕骨：不明；骨体

下肢骨

大腿骨：左；骨体下部

右；ほぼ完形、骨片化 39.5cm

3. 推定性別

頭骨の眉間、眉弓の隆起弱い、側頭骨の乳様突起の突出も弱い。

遺残歯牙の歯冠径はいずれも小さい。

上腕骨と大腿骨は、いずれも細くきゃしゃであるので、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

頭骨の頭蓋冠縫合は、矢状縫合が頭頂部でごく軽微の融合、他の縫合は未融合である。

歯牙の咬耗度はプロカーラーの1~2度であるので、本屍骨の年齢は壮年中期（30歳前後）位と推定する。

5. 推定身長

遺残する右大腿骨長から、本屍の身長はピアソン法で142.1cm、藤井法で149.5cmである。

2号人骨

1. 骨の遺残性

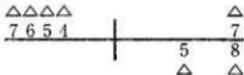
遺残骨は頭骨と右大腿骨のみで、遺残性は不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：頭頂部、後頭部、左右の側頭部

歯 牙：遊離歯牙 7 個



下肢骨

大腿骨：右；骨体中央部

3. 推定性別

頭骨の側頭部の乳様突起の形状と大軀骨の骨体中央部の大きさと後面の筋付着部の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

頭骨頭頂の矢状縫合をみると、頭頂部～孔間部にかけて融合がみられる。

歯牙の大半はエナメル質が平坦化し、咬耗度はプロカーラーの1～2度であるので、本屍の年齢は壮年後期（30代）位が推定される。

5. 推定身長

遺残する大腿骨が完形でないので、本屍の身長は不詳である。

ま と め

IV区5号横穴墓には、2個の頭骨と若干の四肢骨が遺残していた。

被葬者は男（2号入骨）、女（1号入骨）2体で、骨の遺残性はいずれも不良であった。

1号入骨は♀、推定年齢は壮年中期（30歳前後）位、推定身長はビアソン法で142.1cm、藤井法で149.5cmである。

2号入骨は♂、推定年齢は壮年後期（30代）位、身長不詳である。

遺残骨数と遺残性から、先葬は男性、追葬は女性と思量する。

[11号横穴墓]

玄室左側の入口側を頭位にして、左壁奥に向かって下肢骨が遺残するのを1号入骨とする。2号入骨は玄室中央部に位置し、玄室入口側を頭位にして中央奥部に向かって下肢骨が遺残する。玄室やや右側で、玄室入口側を頭位にして下肢を奥の方に向かう入骨を3号入骨と仮称する。2号入骨と3号入骨の上、下肢骨は一部集骨状、一部散在していた。

1～3号入骨の遺残骨は完形のものではなく、遺残性はいずれも不良であった。

遺残骨はきわめて脆弱化し、採取時大半が崩壊した。

本横穴内の被葬者3体は後世の搅乱がみられた。

1号入骨

1. 骨の遺残性

全般的に不良である。

2. 遺残骨とその部位

頭蓋骨

頭骨：顳面、前頭、頭頂、後頭部、上頸骨

下顎体：左右の下顎体

蘭牙：

上肢骨

鎖 骨：不明；骨体 骨片

上腕骨：不明；骨体

前腕骨：不明；骨体 骨片

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部 骨片化

右；骨体中央部 骨片化

脛 骨:左;骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

3. 推定性別

遺残する頭骨と下肢骨の形態的特徴から、男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残する歯牙の咬耗度はプロカーブの2度であることから、年齢は壮年後期位が推定される。

5. 推定身長

遺残骨に完形の四肢骨がないので、本屍の身長は不詳である。

2号人骨

1. 骨の遺残性

本横穴の被葬者3体の内、木尾骨の遺残骨数は最も多かったが、遺残性は不良であった。遺残骨は脆弱化が著しく、骨採取時崩壊した。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：ほほ完形（頭蓋底部欠）

下顎体：左右の下顎体

齒 牙：

○○○○○○○○	○○○○
8 7 6 5 4 3 2 1	// 5 6 7 8 //
××××××××	1 2 3 4 5 6 7 8
	○○○○○○○○

脊椎骨

類椎骨：1～7、椎体上顎のみ、破損化

胸椎骨：1～12、椎体上画のみ、破損化

腰椎骨：1～5、椎体上面のみ、破損化

仙椎骨：1～3、椎体上面のみ、破損化

胸郭骨

肋 骨：左；骨片

右；骨片

上肢骨

鎖 骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

肩甲骨：右；肩甲棘部 骨片化

上腕骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

尺 骨：左；骨体 骨片化

橈 骨：左；骨体 骨片化

手 骨：左；手根骨の一部

下肢骨

大腿骨：左；脆弱化 40.5cm

右；脆弱化 40.5cm

脛 骨：左；骨体

右；近位～骨体中央部

3. 推定性別

本屍の遺残頭骨の形態学的特徴から、男性骨と推定する。

4. 推定年齢

本屍の遺残頭骨の頭蓋冠縫合は、冠状、矢状縫合がかなり融合が進行しており、歯牙の咬耗度を加味すると、年齢は壮年後期～老年期位（40代前後）が推定される。

5. 推定身長

遺残する本屍の大腿骨長から、本屍骨の身長はビアソン法で157.4cm、藤井法で154.9cmである。

3号人骨

1. 骨の遺残性

本横穴中、本屍の遺残骨数が最も少なく、遺残性はきわめて不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部、側頭骨の一部

下肢骨

大腿骨：左；骨体

右；骨体

3. 推定性別

本屍の遺残大腿骨の骨体は、大きく後面の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残骨が少なく、年齢を特定しえない。しいて云えば、大腿骨骨体の大きさから、成人域に達しており、本屍の年齢は壮年期位が推定される。

5. 推定身長

遺残する骨が完形骨がないので、本屍の身長は不詳である。

ま と め

IV区11号横穴墓には被葬者3体が埋葬されていた。

玄室入口からみて、左側の人骨を1号人骨、玄室ほぼ中央部に位置する人骨を2号人骨、玄室や右側中央部に位置する人骨を3号人骨とした。

1～3号人骨の遺残骨は脆弱化し、遺残性は不良であった。

1号人骨は♂、推定年齢は壮年後期位、身長は不詳である。

2号人骨は♂、推定年齢は壮年後期～熟年期（40歳前後）位、推定身長は157.4cmである。

3号人骨は♂、推定年齢は壮年期位、身長不詳である。

本横穴内の被葬者3体は、いずれも後世の搅乱がみられた。

[12号横穴墓]

玄室内には玄室入口からみて、左右に2体ずつ埋葬されていた。

左側の左壁の玄室入口側を頭位にして、左壁奥に沿って伸展位の被葬者を1号人骨、その内側で、頭位を反対に並列した被葬者を2号人骨と仮称する。

玄室右側の壁際に沿って頭位を入口側にして、右壁奥に沿って伸展位の被葬者を3号人骨、その内側に、頭位を奥にして下肢を入口側に伸展位の被葬者を4号人骨と仮称する。

これら4体の被葬者の遺残性は、不良で遺残骨数も少ない。

1号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は頭骨と下肢骨のみで、遺残性は不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部

下顎骨：歯槽（下顎体）の一部

下肢骨

寛 骨：右；腸骨の一部

大腿骨：左；脆弱化、41.5cm

右；骨体中央部

脛 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3. 推定性別

遺残骨の内、頭骨は破損が著しく性別不詳、下肢骨はかなり頑健で、筋付着部の発達良好であるので、男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残骨の頭骨の頭頂部の縫合部は破損、大腿骨の大きさからして、成人域に達しているが、それ以上の年齢区分は不詳である。

5. 推定身長

大腿骨長からビアソン法で159.0cm、藤井法で157.0cmである。

2号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨は頭骨、上肢骨と下肢骨であるが、破損骨が大半を占め、遺残性不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：

歯 牙：遊離歯牙 2個 ($\begin{array}{|c|c|} \hline 6 & 7 \\ \hline \triangle & \triangle \\ \hline \end{array}$)

上肢骨

鎖 骨：左；骨体の一部

右；骨体の一部

上腕骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

下肢骨

寛 骨：右；腸骨の一部

大腿骨：左；脆弱化、42.0cm

右；骨体中央部

脛 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3. 推定性別

遺残骨の上、下肢骨はかなり大きく、筋付着部の発達良好なことから、男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残骨はかなり大きく頑健であるので成人域に達している。

遺残歯牙の咬耗度は、軽度でエナメル質にとどまっているので、壮年前期位が推定される。

5. 推定身長

大腿骨長から、身長推定すると、ビアソン法で160.2cm、藤井法で158.6cmである。

3号人骨

1. 骨の遺残性

頭骨と上、下肢骨が遺残するが、破損骨のみで、遺残性はきわめて不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

脛 骨：右；骨体の一部

3. 推定性別

遺残する上、下肢骨は細くきやしゃであるので、女性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残する上、下肢骨は細くきやしゃであり、玄室左側の男性骨と異なり、長管骨の遠近両端がすべて消失しているので、未熟骨と推察され、青年期（10代後半）が推定される。

5. 推定身長

遺残骨は完形の四肢骨がないので、身長は不詳である。

4号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨数は少なく、遺残性はきわめて不良である。

2. 遺残骨名とその部位

頸蓋骨

下顎体：左下顎体 歯牙 2個釘植

歯 牙：



上肢骨

上腕骨：不明；骨体の一部

3. 推定性別

遺残する下顎の歯牙の歯冠径は小さい。上腕骨は骨体の一部が遺残するが、細くきやしゃであることから、女性骨が推定される。

4. 推定年齢

本横穴には、被葬者4体が埋葬されているが、4号人骨の遺残性が最も不良、遺残骨数も少ない。このことは、被葬者が若年者であることが推察される。

遺残歯牙は永久歯の第2大臼歯まで萌出、しかし、咬頭に咬耗なし。上腕骨の骨体は極端に細くきやしゃであること、恐らく未熟骨のため、遠近両端と骨体が消失した疑いがある。当然他の骨も消失し、結果的に極端に遺残性不良、遺残骨数最低数になったものと想定する。以上から年齢は小児～青年期（10代）が推定される。

5. 推定身長

本屍の遺残骨からは、身長は不詳である。

ま と め

IV区12号横穴墓の玄室内には、左右に被葬者が2体ずつ仰臥伸展位で埋葬されていた。

左側には、頭位を奥壁にした被葬者（1号人骨）とその内側に頭位を反対に、玄室入口側にした被葬者（2号人骨）である。

右側には、頭位を玄室入口側にして、壁際に沿って下肢のある被葬者（3号人骨）とその内側に頭位を反対の奥にして、下肢を玄室入口側にした被葬者（4号人骨）である。

被葬者4体（♂2、♀2）の遺残性は、全般的に不良で遺残骨数も少ない。

1号人骨は男性、推定年齢は成人域、推定身長はピアソン法で159.0cmである。

2号人骨は男性、推定年齢は壮年前期、推定身長はピアソン法で160.2cmである。

3号人骨は女性、推定年齢は青年期（10代後半）、推定身長は不詳である。

4号人骨は女性、推定年齢は小児～青年期（10代）、推定身長は不詳である。

[14号横穴墓]

玄室の右側に若干の人骨が遺残していた。仰臥伸展位で、頭位を玄室入口側にして、奥の方に足位で、足部付近に須恵器があった。被葬者は小児（6～7歳位）1体であった。

1. 骨の遺残性

遺残骨の骨質はきわめてうすく、未熟で脆弱化が著しく、採取時骨片化した。

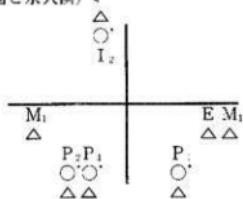
遺残性はきわめて不良、完形骨はない。歯牙は若干遺残、乳歯と永久歯が混在していた。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部

歯 牙：遊離歯牙（乳歯と永久歯）



上肢骨

肩甲骨：左；棘下窩部

上腕骨：左；骨体の一部

右；骨体中央部

下肢骨

大腿骨：右；骨体中央部

3. 推定性別

本屍骨は未熟骨で脆弱化が著しく、遺残性不良であった。

歯牙は乳歯と永久歯が共存、歯牙の萌出状態から、推定年齢は6～7歳位の小児であった。この年齢での性別推定は、一般的に不詳である。

4. 推定年齢

遺残骨は一般的に小さく、きわめて未熟骨である。遺残歯牙の部位と萌出状態をみると、左下顎の第2乳臼歯 (E) は萌出、咬耗もみられた。これに並列して、その遠位部(外側)に永久歯の第1大臼歯 (M₁) が萌出しているが、その咬頭に咬耗が全くみられない。右下顎の第1大臼歯 (M₁) も萌出している。この歯牙は、一般的に6歳位で萌出する所から、6歳臼歯と云われる。

次に、永久歯の右上顎側切歯 (I₂)、左下顎第1小臼歯 (P₁) と右下顎第1、2小臼歯 (P₂, P₁) は恐らく歯槽内にあって未萌出の状態であったと推察された。

以上から、年齢は6～7歳位と推定する。

5. 推定身長

本屍骨には、完形の四肢骨がないので、身長不詳である。しかし、本屍の推定年齢は6～7歳位であるので、推定身長は大約110cm位と推察される。

6. まとめ

IV区14号横穴墓の玄室右側に、被葬者1体が埋葬されていた。

被葬者は頭位を玄室入口側にして、足位を奥の方に、ほぼ仰臥伸展位の状態で遺残骨が散在していた。遺残性はきわめて不良であった。

遺残骨はきわめて未熟で小兒骨である。

遺残歯牙は乳歯と永久歯が共存しており、その萌出状態から、推定年齢は6～7歳位であった。性別と身長は一応不詳であるが、身長は大約110cmと推察される。

[15号横穴墓]

15号穴の玄室奥部には、被葬者7体が仰臥伸展位、または集骨状に埋葬されていた。

玄室右奥壁際に位置する人骨を1号人骨、玄室右中央部を頭位にして、平行に奥部に下肢骨が向う人骨を2号人骨、玄室中央部を上肢骨、奥部に平行に下肢骨が向う人骨を3号人骨、それに平行して、左部に頭部を置き奥部に下肢骨が向う人骨を4号人骨、さらに左部に頭位を置き、奥部に平行に下肢骨が向う人骨を5号人骨、左中央部に集骨状に位置する人骨を6号人骨、その奥の左奥部に位置する人骨を7号人骨とした。

これら7体の被葬者の遺残性は、全般的に不良であった。

1号人骨

1. 骨の遺残性

伸展位で、遺残骨数3個、未熟骨で遺残性不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：頭頂部 骨片化

歯牙：左下顎第2乳臼歯 (E) の歯冠部

上肢骨

上腕骨：不明；骨体 骨片化

3. 推定性別

頭蓋骨の頭頂骨は菲薄で未熟骨であった。

乳臼歯が遺残する所から、小児骨が推定され、性別は不詳である。

4. 推定年齢

左下顎第2乳臼歯 (E) が遺残することから、本屍骨の年齢は大約10歳前後が推察される。

5. 推定身長

遺残する上腕骨が完形でないので、本屍の身長は不詳である。しかし、しいて云えば約120cm前後位と推察する。

6. その他

歯牙（乳臼歯）は須恵器の身の中から検出された。

恐らく、小児が臼歯化後、次の埋葬時歯牙を拾い上げ、須恵器内に安置したものと思量する。

2号人骨

1. 骨の遺残性

本屍は伸展位で、遺残骨は頭骨片と上、下肢骨のみで、遺残性不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部 破損

歯 牙：歯冠 2個 破損

上肢骨

上腕骨：不明；骨体 骨片化

下肢骨

大腿骨：左；ほぼ完形 脆弱化 37.0cm

右；ほぼ完形 脆弱化 37.0cm

脛 骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

3. 推定性別

上、下肢骨は小さく細くきゃしゃであるので、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

本屍遺残骨に年齢推定可能な部位が少ない。破損歯冠部をみると、象牙質が露出していることから、年齢は壮年中期位が推察される。

5. 推定身長

遺残する大腿骨長から、本屍の身長はピアソン法で137.7cm、藤井法で144.0cmである。

3号人骨

1. 骨の遺残性

伸展位で、遺残骨は全般的に脆弱化をきたし、遺残性は不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

脊椎骨

胸椎骨：第12胸椎体上面 脆弱化

腰椎骨：第1～5腰椎体上面 脆弱化

上肢骨

上腕骨：左；ほぼ完形 脆弱化 32.5cm

右；ほぼ完形 脆弱化 32.5cm

尺 骨：右；骨体 骨片化

桡 骨：右；骨体 骨片化

下肢骨

寛 骨：左；腸骨 底平骨片化

右；腸骨 底平骨片化

大腿骨：左；骨体～下端部

右；ほぼ完形 脆弱化 43.0cm

脛 骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

3. 推定性別

遺残する四肢骨は大きく、筋付着部の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

本屍遺残骨に年齢推定可能な部位はない。

四肢骨は大きく、成人骨の平均骨長を上まわるので、成人域で壮年期であろうが、それ以上の年齢区分は不詳である。

5. 推定身長

遺残する上腕骨長から、本屍の身長はビアソン法で164.8cm、藤井法で164.9cmである。 大腿骨長からは、ビアソン法で162.1cm、藤井法で161.1cmである。

以上から、本屍の身長は161～165cm位である。

4号人骨

1. 骨の遺残性

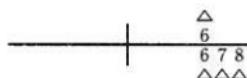
本屍は仰臥伸展位で、本横穴埋葬者中、遺残骨数は最も多かったが、遺残性は不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：前頭部～頭頂部

歯 牙：遊離歯牙 4個



脊椎骨

胸椎骨：第1～12胸椎体上面 脆弱化

腰椎骨：第1～5腰椎体上面 脆弱化

上肢骨

肩甲骨：左；関節面部

右；関節窩片

上腕骨：左；ほぼ完形 脆弱化 32.0cm

前腕骨：左；尺骨片か桡骨片

下肢骨

寛 骨：不明；腸骨 骨片

大腿骨：左；ほぼ完形 脆弱化 42.0cm

右；骨体 骨片化

脛 骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

3. 推定性別

遺残する頭骨、上、下肢骨の形態学的特徴から、本屍骨は男性骨である。

4. 推定年齢

遺残する頭骨の頸蓋冠縫合の融合の程度と歯牙の咬耗度から、本屍骨の年齢は壮年後期～熟年期（40歳前後）位が推定される。

5. 推定身長

遺残上腕骨長から、本屍の身長はピアソン法で163.3cm、藤井法で163.5cmである。

大転骨長からは、本屍の身長はピアソン法で160.2cm、藤井法で158.6cmである。

5号人骨

1. 骨の遺残性

本屍は仰臥伸展位で、遺残骨数は少なく、遺残性不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部、脆弱化 骨片化

下顎骨：下顎体、歯牙若干釘植（脆弱化の為歯冠、歯根崩壊）

上肢骨

上腕骨：右；ほぼ完形 脆弱化 29.0cm

下肢骨

寛 骨：左；骨体 骨片化

右；骨体 骨片化

脛 骨：右；骨体 骨片化

3. 推定性別

遺残する頭骨と下顎骨は、骨採取時脆弱化の為崩壊して性別不詳であった。

遺残する上、下肢骨は小さく、細くきしゃであることから、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残する上腕骨は、成人平均骨長に達しており、成人域で、本屍の年齢は壮年期位が推察される。

5. 推定身長

遺残する右上腕骨長から、本屍の身長はピアソン法で151.9cm、藤井法で150.3cmである。

6号人骨

1. 骨の遺残性

本屍は集骨状で、遺残骨数少なく、完形骨もなく、遺残性は不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：頭頂部

下肢骨

寛 骨：左；脛骨体の一部

右；脛骨体の一部

大腿骨：左；骨体

右；骨体

3. 推定性別

遺残する頭骨と寛骨からは性別不詳、大腿骨骨体は大きく、後面の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

年齢推定する骨と部位がないので、不詳である。大腿骨骨体の大きさと周径とも成人域に達しており、一応壮年期位が推定されるが、それ以上の年齢区分は不詳である。

5. 推定身長

遺残する大腿骨が完形でないので、本屍の身長は不詳である。

7号人骨

1. 骨の遺残性

本屍は集骨状で、遺残骨数は少なく、完形骨もなく、遺残性はきわめて不良であった。

2. 遺残骨とその部位

下肢骨

大腿骨：不明；骨体中央部 骨片化

脛 骨：左；骨体中央部 骨片化

右；骨体中央部 骨片化

3. 推定性別

遺残する下肢骨の大きさと粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残する下肢骨の人さと周径からして、成人域に達しており、本屍は一応壮年期位と推定する。しかし、それ以上の年齢区分は不詳である。

5. 推定身長

遺残する下肢骨が完形骨ではないので、本屍の身長は不詳である。

ま と め

IV区15号横穴墓の玄室奥部には、被葬者7体が埋葬されていた。

玄室右側壁際の人骨（1号人骨）から、順に左側の人骨を2号人骨、最後に左側壁際に平行に遺残する人骨（7号人骨）まで、埋葬法は仰臥伸展位または集骨状であった。

- 被葬者7体の遺残性は、いずれも不良であった。
- 1号人骨は小児、推定年齢は10歳前後、推定身長は約120cm位である。
 - 2号人骨は女性、推定年齢は壮年中期位、推定身長はピアソン法で137.7cmである。
 - 3号人骨は男性、推定年齢は壮年期位、推定身長はピアソン法で、164.8cmである。
 - 4号人骨は男性、推定年齢は壮年後期～熟年期位、推定身長はピアソン法で163.3cmである。
 - 5号人骨は女性、推定年齢は壮年期位、推定身長はピアソン法で151.9cmである。
 - 6号人骨は男性、推定年齢は壮年期位、身長不詳である。
 - 7号人骨は男性、推定年齢は壮年期位、身長不詳である。

考 察

1. 骨の遺残性

骨の遺残性は、遺体の安置された環境（墓の作りや土質）に大きく左右される。

一般的に、乾燥性（排水）のよい土質や砂地では骨の遺残性がよく、粘土質や酸性土質では極端に骨の遺残性は不良である。

島根県の横田町³、仁多町⁴の横穴墓からの出土人骨は、骨の遺残性はきわめて良好で、末梢骨まで遺残することが多い。

これは土質が前者に属していることによる。

これに反して、島根県東部^{5,6,7}と鳥取県西部^{8,9}の土質は、後者に属し、一般的に骨の遺残性は不良である。

本遺跡の横穴墓群出土人骨の遺残性は、近隣の島田池遺跡の横穴墓群出土人骨の遺残性と同様に、全般的に不良であった。

2. 陶棺内の被葬者

横穴墓¹⁰は家族、同族墓的性格が強いとされており、本遺跡群の遺残骨をみると限り、その傾向が強い。

1号横穴墓には、玄室左側～中央部にかけて、須恵器と人骨多数が散在していた。

被葬者は成人4体で、♂2体と♀2体であった。

玄室右側には、右側壁に沿って、完形の須恵質の亀甲形陶棺（175×40×50cm）1基が出土した。

陶棺から出土した被葬者は、10歳未満（7～9歳）の身長約120cm位の小児であった。

どうして、小児が同穴埋葬の成人（♂2体、♀2体）の4体のいずれかよりも厚葬にされたのであろうか。また、本横穴群の中でも、最も厚葬である。しかし、副葬品はない。

この被葬者（小児）は、この部族の中で、どんな役割を演じていたのだろうか。

要 約

島根県東出雲町の淡山池横穴墓群は15横穴より成り、その内人骨出土した横穴墓は8横穴であった。

本横穴墓群出土人骨の遺残性は、全般的に不良であった。

確認された絶被葬者数は32体で、内訳は男性18体、女性10体、小児4体であった。

1号横穴墓の平均被葬者数は4体で、近隣の島田池遺跡横穴群の平均被葬者数2.4体より、はるかに多い。

1号横穴墓では、成人4体（♂2、♀2）が埋葬されており、さらに完形の亀甲形陶棺に小児1体が埋葬されていたことは、特記に値する。

文 献

1. Pearson,K.(1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution.V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races.Phil.Trans.Roy.Soc.London.serA.,192, 169-244.
2. 藤井 明 (1960) :四肢長骨の長さと身長の関係について、順天大保健体育紀、3、49-61.
3. 井上晃孝 (1994) :横田町宮ノ峰横穴墓出土人骨について、角・宮ノ峰横穴、柏原遺跡発掘調査報告書、14-25、 烏根県横田町教育委員会
4. 井上晃孝 (1991) :川子原横穴墓の人骨について、烏根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集、43-47、 烏根県教育委員会
5. 井上晃孝 (1992) :コフケ横穴出土人骨の概要、烏根県埋蔵文化財調査報告書第XVIII集、21-26、 烏根県教育委員会
6. 井上貴央、井上晃孝 (1983) :黒鳥2号横穴の人骨について、黒鳥2号横穴発掘調査報告書、14-19、 安来市教育委員会
7. 井上晃孝 (1984) :高広遺跡横穴墓より出土の人骨について、高広遺跡発掘調査報告書、195-204、 烏根県教育委員会
8. 井上晃孝 (1995) :舟津横穴群出土人骨について、松江市文化財調査報告書第58集、16-19、 松江市教育委員会
9. 井上晃孝 (1997) :島田池遺跡1.4調査区横穴墓出土人骨について、島田池遺跡・鶴賀遺跡、本文編252-274、建設省松江国道工事事務所、烏根県教育委員会
10. 井上貴央、井上晃孝 (1984) :陰田古墳時代人骨について、陰田、74-78、 米子市教育委員会
11. 井上晃孝 (1990) :マケン堀横穴墓群出土人骨について、西伯町埋蔵文化財調査報告書第1集、95-115、 烏取県西伯町教育委員会
12. 池上 悟 (1980) :横穴墓、東京、ニュー・サイエンス社

付表 渋山池古墳群M区横穴墓群出土人骨一覧

区 No.	横穴 No.	被葬 者数	推定性別			推定年齢	推定身長 (ピアソン法)	備考
			男	女	小兒			
	1号穴	5	2	2	1	♂1:壮年期、♀1:壮年中期、 ♀2:青年~壮年初期、 小兒:7~9歳	♂1:164.9cm、♂2:159.3cm、 ♀1.2:不詳、小兒:約120cm	陶棺(小兒:乳歯)
	2号穴	5	4	1		♂1(?) : 壮年期、♂2(?) : 壮年後期、 ♂3(?) : 壮年後期、♂4(?) : 壮年中期、 ♀: 青年期	♂1~4の内、2体は154.6cmと 156.4cm、あとの2体は不詳。 ♀: 139.5cm	
	3号穴	5	2	2	1	♂1(?) : 壮年期、♀1(?) : 青年期、 ♂2(?) : 壮年後期~老年期、 ♀1(?) : 壮年初期、♀2(?) : 7~8歳	1号(♂) : 不詳、2号(♂) : 不詳、 3号(?) : 不詳、4号(♀) : 不詳、 5号(小兒) : 約110cm	5号(小兒) : 乳歯と 永久歯混在
	4号穴	2	1	1		1号(♀) : 壮年中期、 2号(♂) : 壮年後期	1号(♀) : 142.1cm、 2号(♂) : 不詳	
	11号穴	3	3			1号(♂) : 壮年後期、 2号(♂) : 青年後期~老年期、 3号(♂) : 壮年期	1号(♂) : 不詳、 2号(♂) : 157.4cm、 3号(♂) : 不詳	
	12号穴	4	2	2		1号(♂) : 成人成、2号(♂) : 牡牛頭型、 3号(♀) : 青年期、 4号(♀) : 小兒~青年期	1号(♂) : 159.3cm、 2号(♂) : 160.2cm、 3号(♀) : 不詳、4号(♀) : 不詳	
	14号穴	1			1	6~7歳	約110cm	乳歯と永久歯の混在
	15号穴	7	4	2	1	1号(小兒) : 10歳前後、 2号(?) : 壮年中期、 3号(♂) : 壮年期、 4号(♂) : 壮年後期~老年期、 5号(♀) : 壮年期、 6号(♂) : 壮年期、 7号(♂) : 壮年期	1号(小兒) : 約120cm、 2号(?) : 137.7cm、 3号(♂) : 164.8cm 4号(♂) : 163.3cm 5号(♀) : 151.9cm 6号(♂) : 不詳、 7号(♂) : 不詳	1号(小兒) : 頸部器(身) に乳臼歯
		8	32	18	10	4		

(2) 渋山池遺跡1号窯と渋山池古墳群1号窯の地磁気年代

島根大学理学部 時枝克安・成 亨美

1. 考古地磁気年代推定の仕組

地磁気は一定ではなく不規則な変動をしている。この地磁気変動は周期の長いものから短いものまで様々な変動成分を含んでいるが、それらのなかでも、変化を認識するのに数年程度を要する緩慢な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代法で時計の機能をはたすのはこの地磁気永年変化（標準曲線）である。焼成年代を求めるには、まず、焼土の定方位試料を採取し、それらの残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気方向を求める。次に、標準曲線上にこの方向に近い点を求めて、その点の年代目盛りを読みとる。

土や粘土が焼けると、含有される磁鉄鉱や赤鉄鉱等の磁性鉱物が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の方向は焼けた時の地磁気の方向に一致する。磁性鉱物のキュリー温度以上の高温加熱で得られた熱残留磁気は高い安定性をもち、再加熱がないかぎり数万年以上経過してもほとんど変化しない。磁鉄鉱のキュリー温度は578°C、赤鉄鉱では675°Cである。キュリー温度以上に再加熱された場合には、それまでの熱残留磁気は完全に消滅し、そのときの地磁気の方向に新たな熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終加熱時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、過去の地磁気方向の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計として、焼上がいつ焼けたかを推定できる。地磁気年代法を時計にたとえると、針にあたるのは地磁気の方向であり、針の位置を熱残留磁気が記憶していることになる。日本では、地磁気年代法が広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線を基礎として実用化されている。なお、方法の詳細については中島等による解説が参考になる¹⁾。

2. 問題点

地磁気は時間だけでなく場所によっても変化するので、ある地域の標準曲線が西南日本のものとかなり相違している場合がある。厳密に言えば、地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さい場合には西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きい場合には、その地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気を比較する必要がある。中国地方の今までの測定例では、広岡による標準曲線から求めた地磁気年代が考古学的推定年代と整合しているので、この標準曲線を中国地方で使用しても問題はない。

次に、地磁気変動と熱残留磁気から求める地磁気年代は土器偏年と無関係に定まるという印象を与えがちであるが、これは誤りであり、実際には地磁気年代は土器偏年に強く依存している。すなわち、史料等の根拠をもつ少数の年代定点を除くと、標準曲線上の年代目盛りのほとんどは考古学の土器偏年体系を参照して決められている。それゆえ、地磁気年代が年代定点に近いときは問題がないが、年代定点から遠く離れるほど土器偏年の影響を強く受けることになり、もし、土器偏年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点が増加すると、地磁気年代の土器偏年への依存は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地

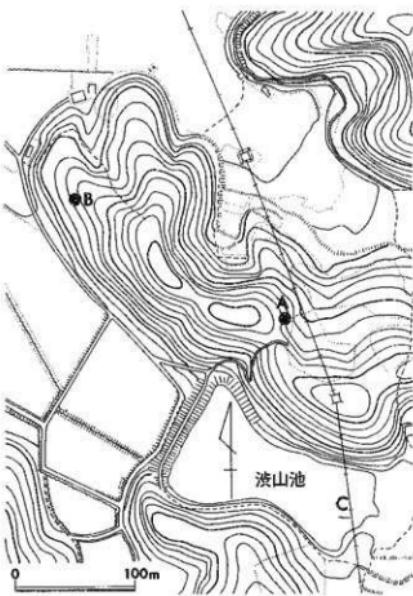


図1 波山池遺跡1号窯と波山池古墳群1号窯の位置
A: 波山池遺跡1号窯 B: 波山池古墳群1号窯
C: 高圧送電線

磁気年代測定法は、遺物を隨伴しない焼土でも有効である点、また、遠隔地の土器編年を対比できる点で独自の性格をもつ。

3. 遺構と試料

波山池遺跡1号窯と波山池古墳群1号窯(島根県八束郡東出雲町揖屋)はともに須恵器を生産した半地下式登窯である。図1に示すように、前者は波山池に近い丘陵の尾根東側斜面に、後者は尾根北端の西側斜面に位置し、相互に約190m離れている。縦層にある波山池道路1号窯の一部には張粘土が施され、窯底はよく焼けた還元色を呈し39度の急勾配となっている。波山池古墳群1号窯の残存部分は少なく、地山の赤土が焼けた窯底は赤褐色の酸化色を呈し勾配は23度である。表1に窯跡の規模、長軸方向、窯底勾配を示す。

窯の操業年代を窯内部から出土した土器から推定すると、波山池遺跡1号窯では、杯の器形が編年表の9~10Cのものと明確に一致するので、操業年代も同様と推定される。

波山池古墳群1号窯では、兜の叩き口と口縁部の文様が編年表の8世紀後半~10世紀のものに比定されるが、相互に近い窯の関連性を重視し、波山池遺跡1号窯と同じ9~10世紀が考えられている。

表2に地磁気年代推定用の定方位試料採取状況を示す。試料の採取法は、整形した焼土塊に樹脂性ケース(24×24×24mm)を被せて、隙間を石膏で充填し、ケース上面の方位をクリノメーターで測定する仕方をとっている。

表1 窯跡の規模、長軸方向、窯底勾配

遺構	残存部長さ	最大幅	長軸方向	窯底最大勾配
波山池遺跡1号窯	2.58m	1.0m	S E 72°	39°
波山池古墳群1号窯	2.6m	1.2m	N E 50°	23°

表2 定方位試料採取状況

遺構	採取場所(試料数)	全試料数
渋山池遺跡 1号窯	高焼成度、窯床は急勾配 窯奥～中央部の床面(一部張粘土)(20)	20
渋山池古墳群 1号窯	低焼成度、焼上範囲が狭い 残存する中央部の床面(20)	20

4. 測定結果

採取した定方位試料の自然残留磁気の強度と方向をスピナー磁力計を用いて測定し、引き続いで交流消磁(消磁磁場=10, 20mT)を行った。ただし、交流消磁(20mT)では、その前の交流消磁(10mT)で方向が大きく分散する試料を除いた。交流消磁というのは、交流磁場中で試料を回転させながら、磁場の強度をある値Hから零になるまで滑らかに減少させて、抗磁力がHよりも弱い磁気成分を消去する方法である。弱い2次磁化が方向分散の原因である場合、この方法で残留磁気の方向集中度を改善できる。

交流消磁による残留磁気の変化を調べると、渋山池遺跡1号窯では消磁磁場20mTで強度が半分以下に減少するが、方向はほとんど変わらなかった。渋山池古墳群1号窯では、消磁磁場10mTで強度が約半減し方向が顕著に変わったが、消磁磁場20mTでは両者ともそれ以上の大きい変化はなかった。。これらの事実に基づいて、渋山池遺跡1号窯では交流消磁(20mT)の結果(2図)から、渋山池古墳群1号窯では交流消磁(10mT)の結果(図3)から小円内に集中するデータを選び、これらを最終焼成時の残留磁気の方向を示すデータとする。表3に小円内のデータから計算した平均方向と誤差の目安となる数値を示す。

表3 残留磁気の平均方向

遺構	I m(度)	Dm(度E)	k	θ_{95} (度)	n/N	消磁磁場
渋山池遺跡1号窯	52.43	-17.03	1760	1.09	11/20	20mT
渋山池古墳群1号窯	51.08	-13.41	1828	1.41	7/20	10mT

I m: 平均伏角

k : Fisher の信頼度係数

 θ_{95} : 95% 誤差角

Dm: 平均偏角

n/N: 採用試料数/採取試料数

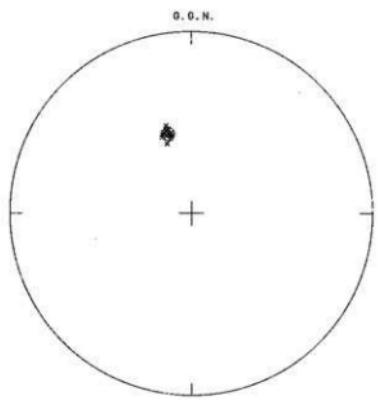


図2 洪山池遺跡1号窯の交流消磁(20mT)
後の残留磁気の方向 [交流消磁(10mT)
で残留磁気が分散する試料を除いている]

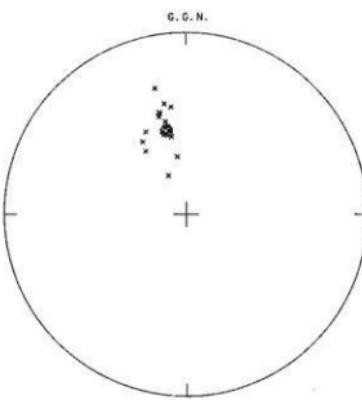


図3 洪山池古墳群1号窯の交流消磁(10mT)
後の残留磁気の方向

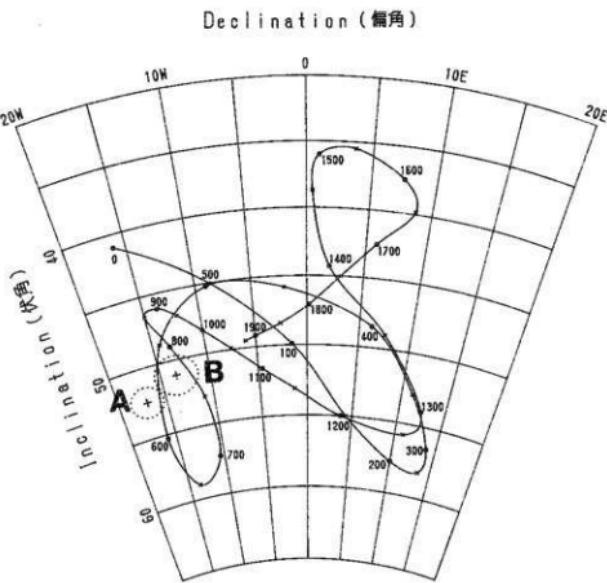


図4 洪山池遺跡1号窯と洪山池古墳群1号窯の残留磁気の方向(十印)と誤差の範囲(点線の楕円)、
および広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気水年変化曲線
A: 洪山池遺跡1号窯 [交流消磁(20mT)] B: 洪山池古墳群1号窯 [交流消磁(10mT)]

5. 地磁気年代の確定

図4は洪山池遺跡1号窯と洪山池古墳群1号窯の残留磁気の平均方向(+)印と誤差の範囲(点線の楕円)、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線²⁾を示す。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。永年変化曲線が狭い範囲で交錯しているために、平均方向に近い永年変化曲線上の点が唯一に定まらず、その結果、各遺構について2つの年代値が可能になる。表4にこのようにして求めた地磁気年代を考古学年代とともに示す。なお、残留磁気と標準曲線が近いもの順に記載している。地磁気年代として表の2つの地磁気年代候補値のうち考古学的年代に近い値を選ぶのが合理的である。すなわち、洪山池遺跡1号窯ではA.D.760±15、洪山池古墳群1号窯ではA.D.775±20となる。

表4 洪山池遺跡1号窯と洪山池古墳群1号窯の地磁気年代

遺 構	地磁気年代	考古学的年代と推定の根拠
洪山池遺跡1号窯	A.D.580±15 A.D.760±15	9C~10C: 坯の形態から
洪山池古墳群1号窯	A.D.775±20 A.D.565±15	8C後半から10C: 壺の文様から 9C~10C: 上記の範囲で洪山池遺跡 1号窯との関連性を考慮

地磁気年代: 残留磁気と標準曲線が近いもの順に記載

下線の年代は考古学年代に近い年代値

6. 考察

洪山池古墳群1号窯の地磁気年代(A.D.775±20)は、洪山池遺跡1号窯との関連性を考慮した考古学年代(9C~10C)よりも25年以上古くなっているが、壺の文様の年代(8C後半~10C)には整合している。他方、洪山池遺跡1号窯の地磁気年代(A.D.760±15)は考古学的年代(9C~10C)よりも40年以上古い値となっており、双方の明白な差が問題となる。9C~10Cに獲得された残留磁気が何かの物理的原因で変化したために誤年代を与えた可能性を考察する。

(1) 2次的磁化

一般に、焼上の残留磁気=熱残留磁気(最終焼成時)+2次的磁化(最終焼成以降)と表現できる。最終焼成時の地磁気の方向を正しく知るには2次的磁化を消去しなければならない。洪山池遺跡1号窯の交流消磁(10,20mT)では、残留磁気強度が半分以下に急減したが、方向にはほとんど変化がなかった。それゆえ、交流消磁(20mT)後には、弱抗磁力の2次磁化は完全に消去されていると考えてよい。本消去の2次的磁化の可能性として落雷によるものがある。落雷の残留磁気

への影響は相互の距離と方向で違うはずである。しかし、図2の交流消磁(20mT)のデータを見ると、窓の広い範囲で残留磁気の方向が一致しているので、落雷の影響は考えられない。このように、年代の元として採用した交流消磁(20mT)のデータは2次の磁化を含んでいない。

(2) 磁気的異方性

磁気的異方性の大きい物質では残留磁気は外部磁場と異なる方向を向くが、洪山池遺跡1号窓の焼けた張粘土上には磁気的異方性はない。

(3) 高圧送電線の影響

高圧送電線(図1)が洪山池遺跡1号窓の約17m離れた東側を走っているので、高圧電流がクリメーターノ磁針を偏向させ、試料の方位測定に影響した可能性がある。しかし、その影響は磁針の回転角にのみ現われるので、残留磁気の伏角は変化しない。これに対して、洪山池遺跡1号窓の残留磁気は9~10°Cの地磁気方向よりも伏角が深くなっている。それゆえ、高圧線の影響はない。

(4) 窓の傾動

洪山池遺跡1号窓が傾けば、焼土の残留磁気も同じだけ傾く。9~10°C頃に獲得された残留磁気が窓の傾動に伴って現在の向きに回転したとすると、窓体が5度以上横方向に傾斜する必要があるが、実測ではその事実はない。

結論として、考えられる範囲では、物理的要因が誤年代を与えた可能性はない。したがって、洪山池遺跡1号窓の地磁気年代と考古学的年代の40年以上の差は今後の問題として残ることになる。

最後に試料採取時にお世話になった鳥根県埋蔵文化財調査センターの椿 真治氏と深田浩氏に感謝する。

註1) 中島正志、夏目信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9

ニュー・サイエンス社

2) 広岡公夫 考古磁気および第四紀古地磁気の最近の動向

第四紀研究 15, 200~203, 1978

(3) 島田遺跡 I 区 4 号横穴墓出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井 上 晃 孝

玄室内には、人骨が約 1 体分が散在していた。骨の遺残性はきわめて不良である。

1. 骨の遺残性

きわめて不良、完形骨はなく、遺残骨数も少ない。

2. 遺残骨名と部位

頭蓋骨

頭 骨：骨片化（頭頂～後頭部）

歯 牙：上下顎左右不明の大臼歯の歯冠、破損化 1 ケ

上肢骨

尺 骨：左右不明の骨体の一部、2 ケ

桡 骨：左右不明の骨体の一部、1 ケ

下肢骨

大腿骨：左；近位～骨体中央部

左；近位～骨体中央部

脛 骨：左；骨体中央部

3. 推定性別

上、下肢骨は未熟骨で、細く、きしゃで女性骨の可能性が高い。

4. 推定年齢

頭骨では、わずかに後頭部の人字縫合部が遺残、縫合は未融合である。

上、下肢骨の骨体中央部は、小さく、細く、きしゃで筋肉付着部の粗面の発達もきわめて弱い。

唯一の歯牙は、上下顎左右不明の大臼歯（永久歯）で歯冠部であるが、破損している。

歯根がないので、萌出歯牙か未萌出の区別は不詳である。

総合的にみて、本屍骨は10代前半位の小児（女性）と推定される。

5. 推定身長

本屍骨には、完形の上、下肢骨がないので、遺残骨から身長は不詳である。

6. まとめ

島田遺跡 I 区 4 号穴の玄室内には、遺残性のきわめて不良の人骨が大約 1 体分遺残していた。

被葬者は 1 体で、若年者である。

推定性別は女性、推定年齢は10代前半位、推定身長は不詳である。

(4) 島田池横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央、影岡優子、亀崎豊実

1.はじめに

本報告は島根県東出雲町の島田池横穴墓群から検出された人骨に関するものである。検出された骨は保存状況が良いとはいがたいが、なかにはほぼ完形の骨も含まれている。多くの横穴墓から多様な埋葬様式をとる骨が検出されたことも特筆してよからう。横穴墓の概要についてはすでに報告されているので、詳細は割愛し、本稿では骨の形態学的特徴と得られた所見について概説する。

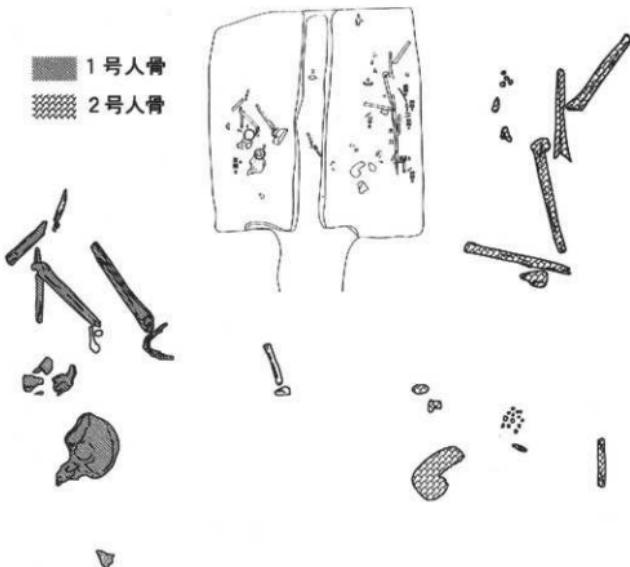
2. 5区1号横穴墓

玄室の左右に屍床があり、それぞれの棺床から各1体分の人骨が検出された。玄門から向かって右の棺床上の人骨を1号人骨、左を2号人骨と呼ぶことにする。

1) 1号人骨

骨は細片化しており、交連状態にある骨はない。骨は原位置ではなく、動いていることは明らかである。頭部の骨が玄室の前側から、下肢の骨が奥側から検出されている。

頭蓋骨は破損が大きいが、左右頭頂骨、前頭骨の一部、左右側頭骨、上顎骨片が検出されている。これらの骨には齧歯類によると思われる咬痕が認められる。



5区1号 横穴墓

前頭部の膨隆は顎者で、眉弓、眉間の突出はまったく見られない。乳頭突起は非常に小さい。三主縫合の閉鎖状況を見ると、内板では完全に癒合閉鎖をきたしている。外板では、冠状縫合の外側部では癒合閉鎖をきたしており、冠状縫合や矢状縫合においても癒合が進行している。右上顎には第2小臼歯と第1大臼歯が釘植している。下顎骨はほぼ完存している。歯牙の咬耗度はMartinの2~3度である。歯式は以下の通り。

欠開 M₁ P₂ 脱 脱 脱 脱
脱 脱 M₁ 脱 P₁ C 脱 脱 脱 脱 P₂ M₁ M₂ M₃

脊柱を構成する骨はまったく検出されていない。

主要上肢骨では右上腕骨が、主要下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。これらの骨には咬痕が認められた。四肢骨は保存が悪く、骨最大長を計測することはできない。右上腕骨は左右の椎体間の溝から検出されている。

骨盤を構成する骨では左右の寛骨片が検出されている。大坐骨切痕は大きい。

椎体の前側から頭部が、奥から下肢骨が検出されていることから、頭部を前方に足を奥壁に伸ばして伸展仰臥位で埋葬されていたと考えられる。

本人骨は骨の全体的な印象から判断して女性のものと推定され、年齢は熟年と考えられる。

2) 2号人骨

椎体の中央付近に頭蓋骨と下肢骨がまとまって検出されているが、交連状態の骨はない。

頭蓋骨は左右頭頂骨の一部と左右鎖骨片が検出されているのみである。頭頂骨には齧歯類によると思われる咬痕が認められた。

歯牙は風化をきたしており保存が非常に悪いが、歯牙では犬歯1本、小臼歯1本、大臼歯3本が検出されている。歯牙の咬耗度は、Martinの1~3度である。犬歯は特に咬耗が著しく、歯冠の1/3が失われている。

主要上肢骨では左右不明の上腕骨が1点、主要下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。下肢骨はやや頑丈に見えるが、男性骨とは確実できない。いずれの四肢骨も保存が悪く骨体部のみが検出されており、骨最大長は計測できない。

本人骨の年齢の詳細は不明であるが、歯牙の咬耗が逆行していることから、熟年以後の成人骨と考えられる。性別は男性をうかがせるものの不明としておきたい。

3. 6区2号横穴墓

玄室の左奥方と左前方の2ヶ所から人骨が検出されている。このうち、左前方の頭蓋骨は玄室床面を覆う厚さ約10cmの土砂の上から検出されている。この頭蓋骨の前頭部は左側壁のほうを向いており、頭頂部は下を向いて検出された。

玄室左前方から検出された頭蓋骨は成人の後頭骨、前頭骨、側頭骨で、保存は極めて悪い。骨は重厚で、後面のレリーフは著明であることから判断して男性骨である可能性が強い。長骨が検出されているが、細胞化が著しく部位を同定できない。年齢は特定できない。

玄室の左奥方から検出された骨は、頭蓋骨片、上顎骨片、部位不明の長骨等であるが、保存が悪く同定できない。

本横穴には少なくとも1体の成人男性が埋葬されていたものと考えられる。

4. 6区4号横穴墓

本横穴墓より出土した人骨は、比較的保存が良好であった。人骨は有縁屍床の須恵器床の上から2体分の人骨が検出されている。奥の1体は頭を左に置き、伸展仰臥位で埋葬されていたもので、この人骨を1号人骨とする。手前の1体は左右の脛骨しか検出されていないが、右に頭を置き、左に下肢を伸ばして埋葬されていたものと考えられる。この人骨を2号人骨とする。さらに、屍床から離れて玄室の右から頭蓋骨が検出されている。ここではこの頭蓋骨を屍床外頭蓋と呼ぶが、この人骨に対応する四肢骨は検出されていない。この頭蓋が2号人骨のものである可能性も否定できない。

1) 1号人骨

本頭蓋骨は保存状態が良く、ほぼ完存している。頭蓋骨の三上径は頭蓋最大長が187mm、頭蓋最大幅が147mm、バジオン・ブレグマ高が140mmで、頭蓋長幅示数は78.6、頭蓋長高示数は74.9、頭蓋幅高示数は95.2となり、頭型はmeso-、meso-、metriokran（中・中・中頬）に属している。眼窓は、右は破損があって計測できないが、左は正方形で、眼窓高と眼窓幅から求めた眼窓示数は97.4となり、高眼窓hypsicnnochに属している。外鼻孔は幅が狭いように見受けられるが、鼻示数は48.2で中鼻mesorrhiniに属している。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓、眉間の隆起は著明ではない。乳様突起は小さく、項面のレリーフは少ない。

三主縫合の閉鎖状況をみると、内板では癒合閉鎖がかなり進行しているが、外板はすべての縫合にわたって未閉鎖である。口蓋縫合の切歯縫合は、外側3/4は癒合閉鎖をきたし消失している。正中口蓋縫合と横口蓋縫合は未閉鎖である。下顎骨にはすべての歯牙が釘植している。第3大臼歯は未萌出である。歯式は次の通り。

M₃

M₃ M₂ M₁ 脱 P₃ 脱 脱 脱 M₃ M₂
M₃ M₂ M₁ P₂ P₁ C I₂ I₁ I₁ C P₂ P₁ M₂ M₁ M₃

歯牙の咬耗は進行していて、Martinの2~3度である。下顎骨は小さく、右下顎中切歯には模状切痕が認められる。また、一部の歯牙の表面にはエナメル質減形成が認められた。

脊柱の骨では環椎、軸椎が頭蓋付近から検出されている。

四肢骨は一般に華奢である。上肢骨の骨では右肩甲骨が検出されているのみである。上肢骨では右上腕骨の一部が検出されている。

骨盤を構成する寛骨は右恥骨片と左寛骨片が残っている。左寛骨の大坐骨切痕は大きく、女性の骨盤をうかがわせる。

下肢骨では左右の大腿骨、左右の脛骨が検出されているが、破損が大きく骨最大長は計測できない。足の骨では左踵骨と右距骨が検出されているが、下腿の骨とは離れた位置から検出されている。

本人骨は頭部を玄門からみて左に置き、足を右に伸ばして伸展仰臥位で埋葬されていたと考えら

れる。交通状態にある骨は認められなかつたが、骨のおおよその配列や遠近関係は比較的よく保たれている。左脛骨は本人骨の下腹部付近に動かされている。

検出された人骨が少なく、骨の残りも悪いが、本人骨は青年期の女性骨と推定される。

2) 2号人骨

左右の脛骨片が検出されているのみである。骨皮質は薄いが、骨端を欠くため、成人骨かどうかの判定はできない。棺床右側から検出された一对の耳環は本人骨に伴うものかもしれない。耳環の検出位置と脛骨の近位端と遠位端の位置関係から考えると、この人骨は頭部を右側に置き、足を左側に伸ばして仰臥位で埋葬されていたものかもしれない。骨最大長の測定できる骨がないため、本人骨の身長は推定できない。性別は不明である。

3) 尸床外頭蓋

頭蓋骨は頭頂部を下に、前頭部を右側壁に向けて検出された。頭蓋骨は前頭部から頭頂部にかけて残っているのみである。眉弓は平坦で、眉間の突出も少ない。前頭部はよく膨隆している。頭蓋冠は全体的に薄い。

縫合は冠状縫合と矢状縫合しか残っていないが、内板・外板ともに未閉鎖であり、若い個体であることをうかがわせる。

本頭蓋に該当する下顎骨は頭蓋の近傍から検出されている。下顎は前歯部のみで、一部の歯牙は釘植しているが、風化が著しく保存はきわめて悪い。歯牙は風化に強いエナメル質の歯冠部のみがろくじて残っていた。第3大臼歯が萌出していたかどうかは定かではない。残存している歯冠の咬耗状況を見ると、咬耗はほとんど進んでいないようで、Martinの0~1度である。

本頭蓋は縫合の閉鎖状況や咬耗から判断して青年期~壮年前半の女性骨と考えられる。なお、この頭蓋が2号人骨のものであるのか、または第3の埋葬遺体のものであるのかは判断できない。



6区4号 横穴墓

5. 6区7号横穴墓

玄室中央付近から四肢骨片が8点検出されている。骨は風化が著しく、骨の部位を特定することは困難で、わずかに大腿骨片と脛骨片が同定できたにすぎない。

被埋葬者の性別、年齢は特定できないが、成人骨であることは確かである。これらの骨が、同一個体のものであるかについても確証はない。したがって、本横穴からは少なくとも1体の成人骨が検出されたとしておく。

6. 6区8号横穴墓

玄門から見て玄室左側からは、玄室手前に頭を置いた人骨が2体、玄室の右半分からは1体の人骨が検出されている。玄室左側の2体の人骨のうち、側壁よりの人骨を1号人骨、中央よりの人骨を2号人骨とする。また、玄室右半分から検出された人骨を3号人骨とする。1号人骨と2号人骨は比較的の原位置をとどめているが、3号人骨の骨は無秩序に検出されている。

1) 1号人骨

頭蓋は前頭部、頸頂部、左右の側頭部の部分が検出されており、後頭部と頭蓋底を欠く。計測不能な部分が多く、正確な頭型は不明であるが、頭蓋は前後に長く、長頭の傾向がうかがえる。

眉弓は突出しており、眉間もやや膨隆している。前頭部はなだらかに頭頂部に連なっている。乳様突起は破損があるが、大きいようである。

頭蓋縫合をみると、冠状縫合、矢状縫合は外板、内板ともに癒合閉鎖をきたしている。

本人骨の下顎骨は検出されていない。歯牙は咬耗が進んでおり、M art in 2~3度である。歯式は次の通りである。

脱 M₁ M₁ 欠 P₁ C 欠 欠 欠 欠 C P₂ P₂ M₁ M₁ 欠

脊柱の骨では腰椎が1点検出されているのみである。四肢骨は風化が進んでおり、保存状況が悪く、計測できない。全体としては頑丈な感じで、男性骨をうかがわせる。

主要上肢骨では左右の上腕骨が、主要下肢骨では左右の人腿骨、左右の脛骨が検出されているが、骨最大長は計測できない。骨盤を構成する骨では、右腸骨の一部が検出されているのみである。

人骨の配列状況をみると、頭部を玄室奥に置き、足を奥壁に向けて伸展仰臥位で埋葬されていたものと考えられるが、頭部は腹部に動かされている。そのほかの骨も若干動かされているが、骨の上下、左右の関係は保たれている。2号人骨と1号人骨の骨の検出状況から考えると、2号人骨の埋葬に伴って1号人骨の骨寄せがおこなわれたような印象をうける。

骨の頑丈さや形態、および縫合の閉鎖状況から考えると、本人骨は熟年男性と推定される。

2) 2号人骨

頭蓋は前頭部~頸頂部、左側頭部が残存しているが、細片化しているので頭型をうかがい知ることはできない。

眉弓は平坦であるが、眉間はやや膨隆している。前頭骨はよく膨隆しており、一見女性の頭蓋をうかがわせる。乳様突起は中等度に発達している。頭蓋冠の厚みは比較的厚い。

頭蓋縫合をみると、冠状縫合は外板・内板ともに癒合閉鎖をきたしており、矢状縫合の外板は未

閉鎖であるが、内板では癒合閉鎖が進んでいる。

上顎歯は咬耗がやや進んでおり、Martinの2~3度である。歯式は次の通りである。

M₃

欠 I₂ C' P₁ P₂ M₁ M₂ M₃

四肢骨も保存が悪いものが多く、完形の骨は認められない。主要上肢骨では、左右不明の上腕骨片、主要下肢骨では左右の大転骨と左右の脛骨が検出されている。骨はやや頑丈であるように見受けられるが、典型的な男性骨ではない。破損が大きく、骨最大長は測定できない。

骨盤を構成する骨では左右の寛骨片が検出されている。いずれも寛骨臼から大坐骨切痕にかけての部分である。大坐骨切痕の角度は狭く、また妊娠痕が認められないことから、男性の寛骨をうかがわせる。そのほかの骨では椎骨片、肋骨片が検出されているにすぎない。

本人骨の年齢は縫合の閉鎖状況や歯牙の咬耗度から判断して老年である。性別は寛骨の所見を重視して、女性骨としておくが、確言できない。

本人骨の配列状況は原位置を比較的良くとどめている。頭を玄室の前側に置き、下肢を奥壁に向けて伸展仰臥位で埋葬されていたものと考えられる。下肢や骨盤部の関節は交差状態をとどめているため、本横穴墓における最後の埋葬者であった可能性が高い。

3) 3号人骨

頭蓋は前頭部から頭頂部と右側頭骨片が検出されているが、顔面頭蓋や頭蓋底を欠く。眉弓は平坦で、眉間の突出も著明ではない。前頭部はよく膨隆している。

冠状縫合は内板、外板とともに癒合閉鎖をきたしており、矢状縫合は外板では未閉鎖の部分もあるが、内板ではほとんど癒合をきたしている。

歯牙は前歯、小臼歯、大臼歯の歯冠部の一部が残っているのみで、部位の同定は困難である。咬耗はやや進んでおり、Martinの2度である。



6区8号 横穴墓

四肢骨は全体に華奢である。上肢骨は部位を同定できるものはない。下肢骨では大腿骨と脛骨がそれぞれ2本検出されているが、保存が悪く左右を区別できない。

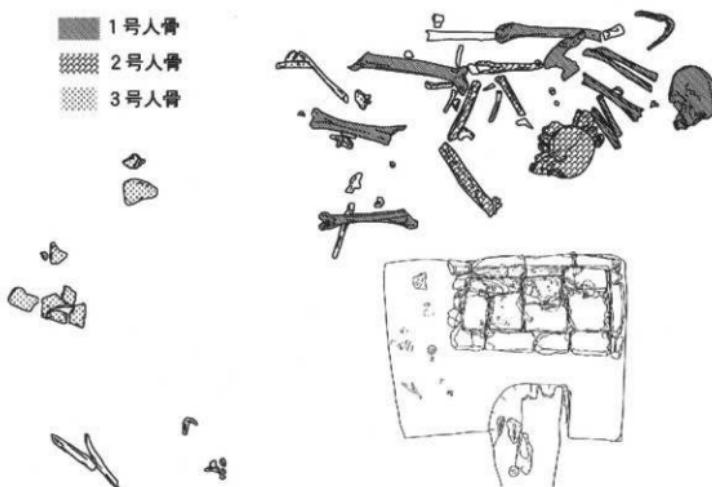
本人骨の性別は頭蓋骨や寛骨の特徴から判断して女性であると考えられる。年齢は特定しがたいが、縫合の閉鎖状況から判断して老年と考えられる。

7. 6区9号横穴墓

玄室の奥壁と右壁に沿って、石製の屍床が設けられており、その上から2体の成人骨が検出された。いずれの人骨も玄門からみて右側に頭部を置き、下肢を左側に向けた状態で検出されている。このうち、奥壁寄りの人骨を1号人骨、手前の人骨を2号人骨とする。これらの人骨に混じって、子供の人骨が石製の屍床から検出されている。この子供の人骨を3号人骨とする。玄室の左側には人骨が散布した状態で検出されている。この人骨のなかには子供の人骨も含まれており、石製屍床から検出された3号人骨の一部とみても矛盾はないので、左側から検出された頭部も3号人骨として扱うことにする。その他の玄室左側から検出された長骨は保存が悪く、部位を特定できない。

1) 1号人骨

頭蓋は左側頭部、左眼窩部、鼻部の一部を欠くが、他はほぼ完存している。左側頭部が欠損しているため、頭型のすべての値を算出できないが、頭蓋最大長は182mm、バジオン・プレグマ高が137mmで、頭蓋長高示数は75.3である。左眼窓は破損が大きく、外形がうかがえないと、右眼窓



6区9号 横穴墓

は矩形で、眼窩高と眼窩幅から求めた眼窩示数は91.0となり、高眼窩 h y p s i k n o c h に属している。眉弓や眉間はやや突出しており、乳様突起は中等度に発達している。外後頭隆起はよく発達しており、項面のレリーフは粗造である。

三主縫合を見ると、外板はほぼ全域にわたって癒合閉鎖をきたしており、内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。口蓋をみると、切歯縫合はほとんど癒合閉鎖している。口蓋の後半部は破損のため、縫合の閉鎖状況は不明である。

下顎骨は比較的華奢である。歯牙はやや咬耗しており、Martin の2度である。歯式は次の通りである。

M₁ M₁ P₁ P₁ C 脱 閉 欠 I₁ C P₁ P₂ M₁ 脱
脱 M₁ M₁ P₁ P₁ C I₁ 脱 脱 脱 C P₁ P₂ M₁ M₂ M₃

四肢骨は全体的にそれほど頑丈な印象は受けない。主要上肢骨では左右の上腕骨、右桡骨、右尺骨が、主要下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。いずれの骨も骨端を欠き、骨最大長は計測できない。骨盤の骨では左寛骨の一部が検出されている。

本人骨は頭蓋の特徴から判断して、男性と推定される。年齢は癒合の閉鎖状況から熟年と考えられる。

2) 2号人骨

頭蓋骨は全体的に小さく、左右頭頂骨、左側頭骨、右錐体、前頭骨、上顎骨の一部が残存している。頭蓋骨の表面には齧歯類によるものと思われる咬痕が認められる。

前頭部はあまり膨隆しておらず、なだらかに頭頂部へ移行している。眉弓はやや膨隆し、眉間もやや突出している。乳様突起は破損していて、その外観をうかがい知ることはできない。

三主縫合の閉鎖状況をみると、内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。外板はほぼ癒合閉鎖をきたしているようである。口蓋縫合をみると、切歯縫合と正中口蓋縫合は癒合閉鎖して消失している。下顎歯は破損が大きく、判別できる歯牙は少ない。左右不明の大臼歯1本、小臼歯2本、大臼歯1本が検出されている。咬耗は進行しており、Martin の3度である。歯式は以下の通りである。

閉 脱 M₁ 脱 脱 C I₁ 脱 脱 脱 破 破 欠 欠 欠 欠
欠 脱 脱 脱 脱 脱 脱 脱 脱 脱 脱 欠 次

主要四肢骨は上腕骨と大腿骨が検出されているが、上腕骨は細片化しており原形をとどめていない。大腿骨は骨体部のみが検出されている。この大腿骨は粗線がよく発達している。

本人骨は熟年後半の男性であると考えられる。

3) 3号人骨

頭蓋骨は保存状態が非常に悪く、わずかに頭頂骨片と右上顎骨片のみが検出されているにすぎない。検出された頭蓋骨は薄く、本頭蓋骨が小児骨であることがうかがえる。上顎骨には第2乳臼歯と第1大臼歯が釘植しており、遊離歯として第1乳臼歯が検出されている。第1乳臼歯の歯槽骨内には、第1小臼歯が埋伏している。また、上顎骨内に埋伏していたと思われる小白歯2本、大臼歯

片、右犬歯の歯冠部分が検出されている。下顎骨には歯牙が釘植しており、一部は遊離歯として検出された。歯式は以下の通りである。

P:	C
M ₁ m ₂ (m ₁) 脱 脱 欠	
M ₁ m ₂ m ₁ c 脱 脱	脱 脱 c (m ₁) (m ₂) (M ₁)
C	C P ₁ P ₂ M ₂ ?

これらの歯牙を詳しく観察すると、乳歯においては犬歯の歯根が1／3程吸収されている。また、永久歯においては、第1大臼歯は約1／2の歯根が形成されており、第2大臼歯の歯根は未形成である。また、第1小臼歯の歯根は約1／5、第2小臼歯ではわずかに形成されているにすぎない。歯牙の崩出状況や歯根の形成状況から考えると、本人骨の年齢は7～9歳程度の小児と推定される。

四肢骨は左右人腿骨と脛骨が検出されているが、破損しているため詳細は不明である。性別は特定できない。

8. 6区10号横穴墓

玄室の中央床面には猿道の長軸方向に溝が設けられている。玄門からみて、玄室中央部と玄室中央左寄りから脛骨が検出されている。左寄りから検出された骨は長骨が多く、前後方向に配列しているものが多い。また、中央付近の骨は頭蓋骨片、四肢骨片である。骨の保存状態は良くなく、部位を特定することは困難である。以下同定できた骨について述べる。

中央付近の骨には小児の骨が含まれている。小児の骨は頭蓋骨片と下顎骨片のみである。年齢は特定できない。成人骨では前頭骨、蝶体、左肩甲骨のほかに、左右不明の上腕骨が1点、左右不明の大腿骨が1点、左の脛骨が1点、左右不明の脛骨が1点含まれている。したがって、中央付近には小児が1体、成人が1体の骨が含まれていたことになる。性別は特定できない。

左寄りから検出された骨には頭蓋骨は含まれていない。椎骨片が1点含まれているほか、左右不明の上腕骨が3点、左大腿骨が1点、左右不明の大腿骨が2点、左脛骨が1点、左右不明の脛骨が2点含まれている。したがって、左よりの骨群には少なくとも2体の成人骨が含まれていたことになる。性別は特定できない。

9. まとめにかえて

本横穴墓群から出土した人骨は次のようである。

- 1) 5区1号横穴墓からは2体の人骨が検出された。熟年女性（1号人骨）と熟年以後の性別不明の人骨（2号人骨）である。
- 2) 6区2号横穴墓には少なくとも1体の成人男性が埋葬されていた。
- 3) 6区4号横穴墓からは3体の人骨が検出された。青年期女性（1号人骨）、年齢・性別不詳（2号人骨）、青年期～壮年前半女性（屍床外頭蓋）である。
- 4) 6区7号横穴墓には少なくとも1体の成人骨が埋葬されていたが詳細は不明である。

- 5) 6区8号横穴墓からは3体の人骨が検出された。熟年男性(1号人骨)、熟年男性(?) (2号人骨)、熟年女性(3号人骨)である。
- 6) 6区9号横穴墓からは3体の人骨が検出された。熟年男性(1号人骨)、熟年後半男性(2号人骨)、7~9歳程度の小兒(性別不詳)(3号人骨)である。
- 7) 6区10号横穴墓からは1体の小兒骨と3体の成人骨が検出された。性別、年齢は不明である。

島田池横穴墓群の人骨は保存が悪いものが多く、被埋葬者の人物像を特定したり、埋葬順位を決定するには至らなかった。しかし、本横穴の造り方は多様性に富み、なかには明らかに改葬墓と思われるものも含まれている。同じ地域にあって、遺物や埋葬様式の面でこれほど多様性に富むのは何らかの理由があることであろう。残念ながらその系団は見いだせなかったが、改葬のあり方に関しては若干の示唆的な所見を得ている。今後、類例を検討して別の機会に公表したい。

稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた島根県埋蔵文化財調査センターの各位、とりわけ、人骨の取り上げに際し、有益な御助言をいただいた原田敏照氏に厚く御礼申し上げる。

10. 参考文献

島根県教育委員会(1977)『島田池遺跡・鶴賀遺跡』本文編(第1分冊)

島根県教育委員会(1977)『島田池遺跡・鶴賀遺跡』本文編(第2分冊)

横穴墓名 人骨番号 性別・年齢	6-4号墓		6-9号墓	
	1号人骨	2号人骨	1号人骨	2号人骨
頭頂部				
1	頭蓋最大長	187	182	
8	頭蓋前大綫	147		
17	パジン・ブレグマ高	140	137	
8/1	頭蓋正面幅示数	78.6		
17/1	頭蓋正面高示数	74.9	75.3	
17/8	頭蓋側面幅示数	95.2		
9	最高前頭幅	95		
10	最高前頭幅	120		
5	頭蓋前大綫	101	96	
11	鼻耳径	122		
12	最大後頭幅		107	
13	乳突認	99		
7	大後頭孔高	33.8	36.5	
16	大後頭孔幅	27	29	
16.7	大後頭孔示数	79.9	79.3	
23	頭蓋矢状面	533		
24	頸風長	322		
25	正中矢状長	392	377	
顎面複合				
40	顎長		90	
43	上頬幅	101		
48	上頬高		70	
50	前頭角面幅	19		
44	鼻脛距離	95		
50.44	距離示数	20		
51	眼窩幅(右)	38	39	
	眼窩幅(左)	38		
52	眼窩高(右)		35.5	
	眼窩高(左)	37		
52.51	額窩示数(右)		91.0	
	額窩示数(左)	97.4		
54	鼻高	23.5	30.6	
55	鼻高	48.8	51	
54.55	鼻示数	48.2		
57	鼻骨最小綫	8.6		
61	上頬由縫端	66	60	

図版説明

- 1 a ; 頭蓋正面観 (6区4号横穴墓1号人骨)
 1 b ; 頭蓋側面観 (6区4号横穴墓1号人骨)
 1 c ; 頭蓋上面観 (6区4号横穴墓1号人骨)
 2 a ; 頭蓋正面観 (6区9号横穴墓1号人骨)
 2 b ; 頭蓋側面観 (6区9号横穴墓1号人骨)
 2 c ; 頭蓋上面観 (6区9号横穴墓1号人骨)

図 版

数字は挿図番号と対応



淡山池古墳群遠景（南から）



同　（上空から）

図版2



渋山池古墳群調査前遠景
(西から)



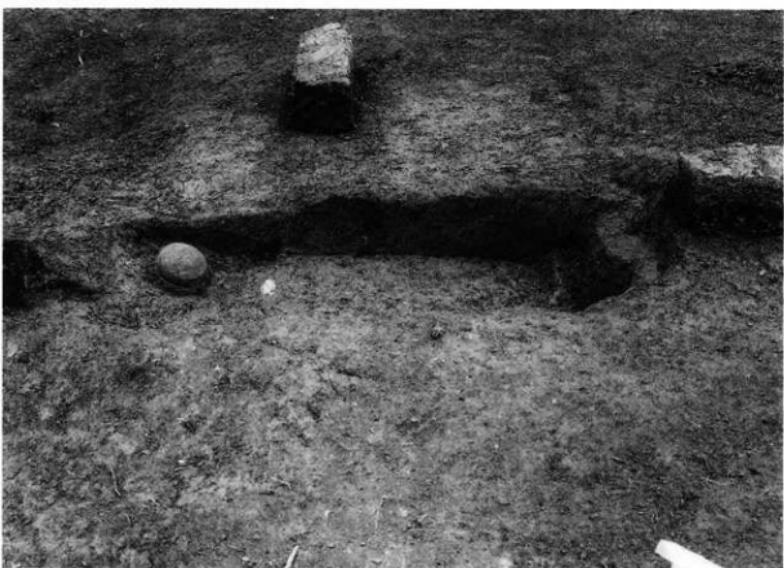
III区 調査前 近景
(西から)



III、IV区 調査前近景
(南東から)



S X 01検出状況（西から）



同 遺物出土状況（西から）

図版 4



S X02検出状況（西から）



同 遺物出土状況（北から）



S X03検出状況（北から）

同 埋土除去後（北西から）



SK01 遺物出土状況
(西から)



同 (北から)



図版 6



1号墳主体部検出状況
(東から)



同 完掘状況(東から)



2号墳主体部調査風景
(南から)

同 完掘状況（北東から）



3号墳溝出土物出土状況
(南から)



同 完掘状況（北から）



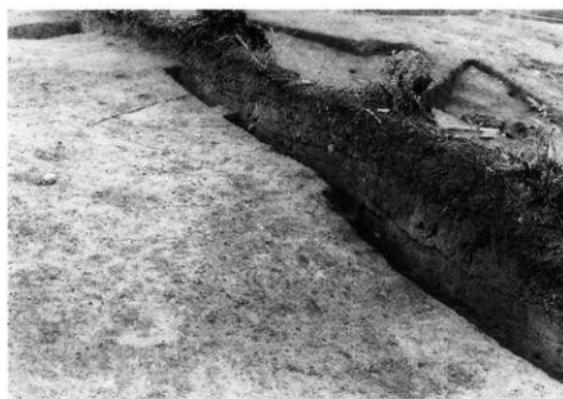
図版 8



4号墳溝検出状況（南東から）



同 完掘状況（東から）



5号墳主体部検出状況
(北から)



同 主体部木棺痕検出状況（北から）



同 完掘状況（北東から）

図版10



6号墳周溝検出状況（北から）



同 主体部検出状況（西から）



同 主体部横断土層断面（東から）



同 主体部完掘状況（北から）



同 完掘状況（北から）

図版12



8号墳主体部検出状況
(北東から)



同 主体部完掘状況(北
から)



同 完掘状況(北から)

9号墳周溝検出状況（北から）



8号・9号墳溝土層断面
(北から)



9号墳遺物出土状況（北から）



図版14



10号・11号墳完掘状況（北西から）



S X 04土師器出土状況（南から）

12号墳完掘状況（西から）



1号横穴墓縦断土層（一）
(南から)



同（二）（南から）



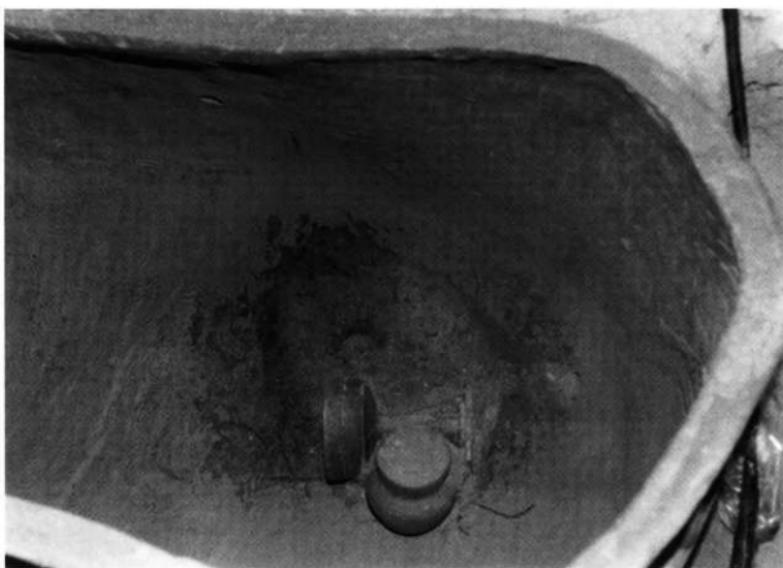
圖版16



1号横穴墓玄室内堆積狀況



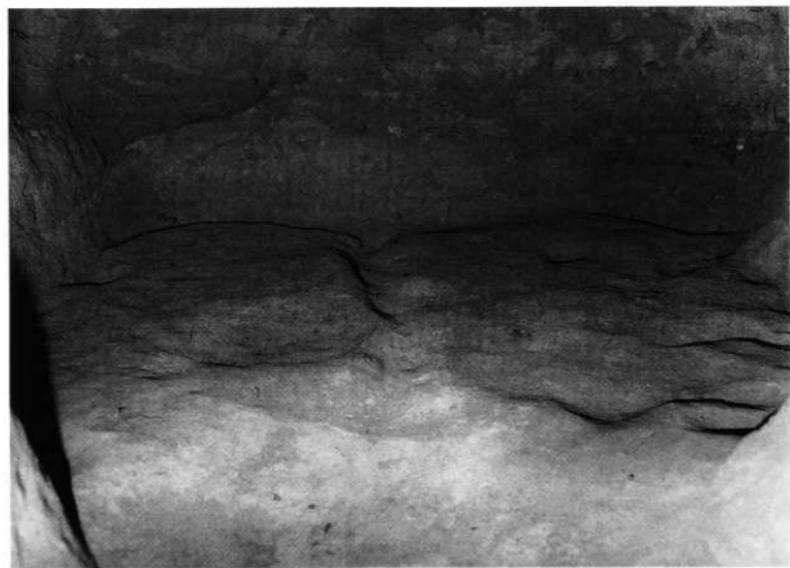
陶棺內橫斷土層



陶棺內遺物出土狀況



陶棺除去後遺物出土状況



1号横穴墓玄室完掘状況

図版18



2号横穴墓前庭部遺物出土状況（南から）



同 縦断土層（南西から）



同 玄室ノミ痕



同 家形石棺



敷石部人骨出土状况



同 全景

図版20



3号横穴墓前部遺物出土状況（南東から）



同 縦断土層（南東から）



同 閉塞状況（南から）

同 玄門部土層堆積状況



同 玄室内遺物出土状況



同 玄室右袖～天井部



図版22



4号横穴墓前庭部遺物出土状況（南から）



同、閉塞石出土状況
(南西から)



同 全景 (南西から)

同 玄門・羨道部（玄室
から）



同 玄室右袖～右壁



同 玄室天井部ノミ痕



図版24



5号横穴墓前部遺物出土状況（一）（南西から）



同（二）（北東から）



同 玄室内遺物出土状況
(南西から)

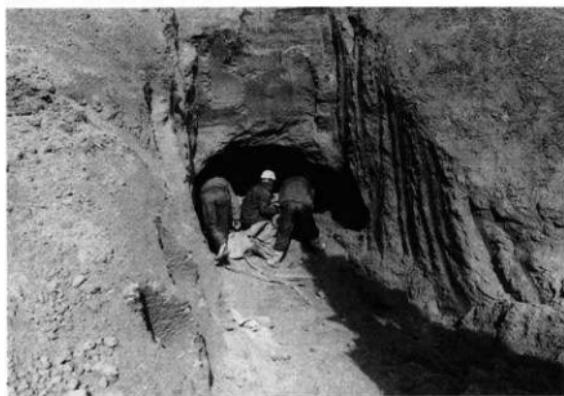
同 石棺内遺物出土状況



同 石棺組み合わせ状況



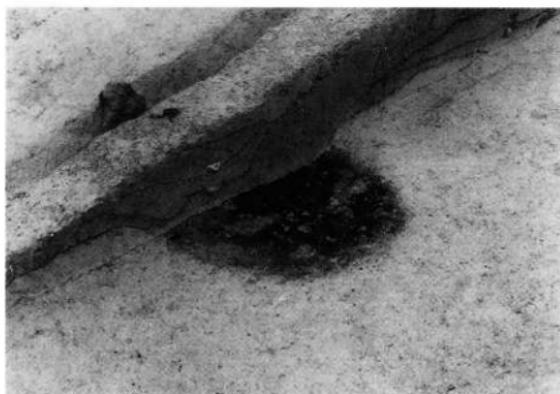
同 石棺取り出し作業風景



図版26



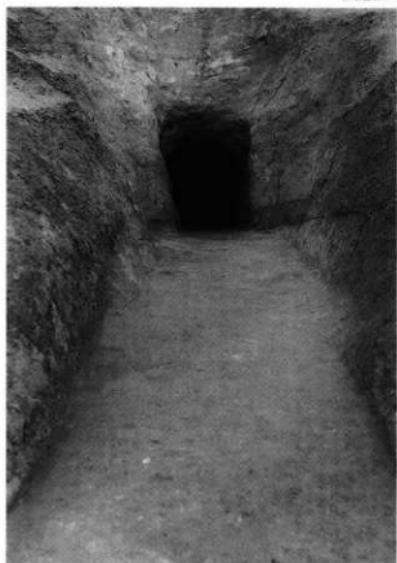
6号横穴墓前庭部縦断土層（南から）



同 炭溜り



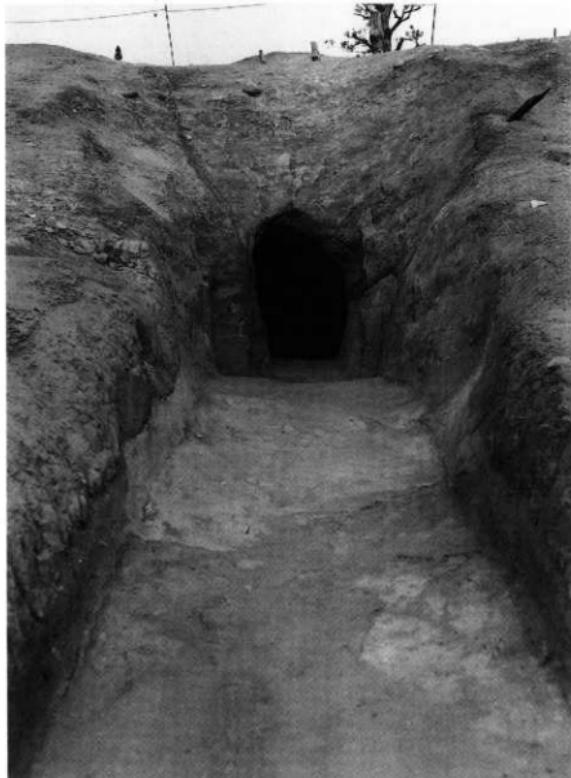
同 炭除去後



同 全景（南西から）



7号横穴墓前庭部縦断土層（南から）



7号横穴墓全景（南西から）



同 玄室完掘状況

8号横穴墓前庭部縦断土層（南西から）



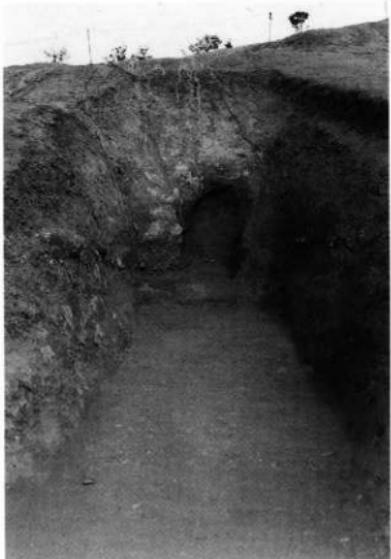
同 遺物出土状況（南西から）



9号横穴墓前庭部横断土層（南西から）



図版30



9号横穴墓 全景（南西から）



10号横穴墓全景（西から）



10号横穴墓前部横断土層（西から）